
SWEET TRAP

麻乃そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SWEET TRAP

【Nコード】

N2959P

【作者名】

麻乃そら

【あらすじ】

大企業の御曹司、朝吹紳一郎の花嫁に選ばれたのは普通の高校生の望（男子）。脅される形で結婚した望は、大きなお屋敷で若奥様として暮らすことになったのだが……

第一話（前書き）

サイトで公開したものに修正を加えました。
内容は変わっておりません。

第一話

「それじゃあ、行つて来るよ、望」

「い、行つてらっしゃいませ。だ、旦那様？き、気をつけて」

僕は激しくどもりながら、早朝だというのにスツキリ男前のこの家の主人、朝吹紳一郎に言った。

メイドさんや秘書のひとが聞いているのに恥ずかしい…。

「旦那様が……。それもいいが

もつと親しみを込めて呼んでほしいな」

え？

「た、例えば？」

「紳一郎って呼んでごらん？」

「し、紳一郎さん？」

僕はまたしてもどもりながら、彼の名前を呼んだ。

すると彼は僕の耳もとに唇を寄せて囁いた。

「……体は大丈夫か？」

昨日は疲れていたのに、無理をさせてしまったからな。

何しろ、新婚初夜……」

「わーっ！！」

紳一郎さん！は、早くいかないと会社に遅刻します！」

彼はクスクスと笑いながら『なるべく早く帰るから』と言って、高級外車の後部座席に乗り込んだ。

絶対さっきの声、秘書のひとに聞こえたぞ。

何であんなこと人前で言うんだよ、それもありもしないことを！

断つておくが、昨日は本当になにも、何にもなかったんだ！！

昨日僕はクタクタに疲れて、部屋に戻った途端にベッドに倒れこんで寝てしまった。

それが、

朝目が覚めると、おそろしいことにあの男、昨日から僕の夫になった『朝吹紳一郎』が、

同じベッドの僕の隣で気持ちよさそうに寝ていたんだ…。

「なんで、こんなことに……」

僕は昨日、『桃田望』から『朝吹望』になった。

事の発端は、一ヶ月前にこの朝吹邸で行われたパーティだったんだ。

第二話

「なんだよ。このパーティ、ほとんど女の人ばかりじゃないか！」
「やっぱり、これが紳一郎さんの花嫁選びのパーティという噂は本当だったのね」

僕より年がひとつ上の姉の環が言った。

「花嫁選び？」

なんで僕のところ、招待状が来るんだよ？」

「さあねえ、望のこと女の子だと思っただんじゃない？」

間違いやすい名前だものね」

先日、僕と環に『朝吹紳一郎』の名前でパーティの招待状が届いた。
朝吹紳一郎というのは国内だけでなく海外でも事業を展開している有名な朝吹グループの跡取りだ。

確か20代後半で、政財界のご令嬢の花婿候補ナンバーワンらしいけど。

なんで、そんなひとが僕達に招待状を？

確かに僕達の父親も会社を経営していて、朝吹グループ関係の会社と取引はあるらしいけど、

全然比べ物にならないくらいちっぽけな会社だ。（お父さん、ゴメン）

僕達はもちろん、父親も本人に会ったことはない。

両親や僕が不審に思っているのに、姉の環は

「雑誌で見たことあるけど、あそこのお屋敷素敵なのよねえ。

お庭も拝見したいわ。なんでも大きな温室があるらしいわよ。

お料理も豪華なんでしょうねえ。あー楽しみ」

……御曹司のことより、庭や料理の方が気になるらしい

姉は今日一日開放されているらしい庭と温室を見に行ってしまった。僕達を招待した男の姿は、最初に皆の前で挨拶をしたのを遠くから眺めただけだ。

彼の花嫁選びが本当なら、僕がここにいる意味はないよなあ。

『朝吹紳一郎』の招待を断るなんてとんでもないからって、父親に言われたから来たんだけど……。

帰っちゃおうかな、などと考えていると、

「いかがですか？」

ハンサムなボーイさんが僕に声をかけてきた。

手に桃まんじゅうがたくさん盛られた大きなお皿を持っている。

なんだかこの豪華な西洋風のパーティにはそぐわないような気がするのだが、

超高級桃まんじゅうなのだろうか？

それならぜひ、食べてみたい。

僕は自分の苗字に桃がつくからって訳ではないが、桃まんじゅうが大好きだ。

なにしろお気に入りの桃まんじゅうを置いてあるお店に、週一通っているくらいなのだ！

「その一番上のが大きいですよ？」

僕は言われた通り、一番上の桃まんじゅうを取った。

別に大きいのが欲しかったわけじゃないんだけど、ピラミッドみたいに積んであつたら普通一番上から取るよね？

僕はその桃まんじゅうをパクンと頬張った。

「ん？」

何か固いものが入ってる。

「何だ？これ」

口の中から出したそれは、キラキラした大きい宝石が嵌めこんである指輪だった。

「？何でこんなものが桃まんじゅうに？」

僕は、まだ近くにいる桃まんじゅうを勧めてくれたボーイさんと呼んだ。

「あのー、こんなものがさっきの桃まんじゅうの中に入ってたんですけど」

ボーイさんは僕が差し出した指輪を受け取ると一瞬嬉しそうな顔をしたのだが、

すぐに驚いた顔になり、「こ、この指輪は！」と叫んだ。

……なんだかわざとらしい？

「桃田様、しばらくこちらでお待ちください。いいですね！」

「は、はいっ！」

あれ？僕このひとに名前言ってないよね？

僕はボーイさんに言われるまま、手に食べかけの桃まんじゅうを持って律儀にその場にとどまっていたのだが、後でそれを激しく後悔することになったんだ。

第三話

僕はしばらくして戻ってきたボーイさんに、パーティの会場から離れた豪華な応接室に案内された。

来る途中にいくつもドアがあり、もしここではぐれたら絶対遭難すると思つて、

道順を覚えておこうと思つたのだが、途中で諦めてしまった。

一体、いくつ部屋があるんだよ！

環が言つてた通りすごいお屋敷だ。

掃除が大変そうだなあ……。

「申し訳ありません。すぐに紳一郎様が来られますので、もう少しお待ちください」

ボーイさんは丁寧にお辞儀をして部屋から出て行つてしまった。

あの『朝吹紳一郎』がここに？

僕に何の用があるんだ？

あの指輪のせい？……なんなんだろう？

なんだか緊張してきて、さっきのボーイさんが出してくれたお茶をゴクリと飲んだ。

凄く高そうなお茶碗だ。

割らないようにしなくちゃ……。

応接室のドアが開いて、背の高い男性が入ってきた。

朝吹紳一郎だ！

さっきは遠目だったからよくわからなかったけど、噂通り嫌味なほどの男前だ。

いかにもクールでやりての実業家って感じ？

朝吹さんはしばらくの間僕を観察するように見て、それから口を開

いた。

「君がこの指輪をみつけてくれたのか？まいったな……」
「？」

何にまいったのか知らないが、顔はニコニコ……いや、ニヤニヤしている。

「……みつけたっていうか、僕がたまたま食べた桃まんじゅうにその指輪が入って……」

「君、男の子だよな？」

「あ、あたりまえです！」

この人、顔も頭もよさそうだけど眼が悪いのか？

「そうか……。これも運命かもしれないな」

「え？」

彼は顎に手をやって頷くと、僕に手招きした。

「ちよつとここに来て、僕の前に立ってくれないか？」

「？」

僕は言われたとおりに彼の正面に立った。

「手を出して、ああ、左手だ」

僕が左手を差し出すと、彼は持っていた例の指輪を僕の薬指にはめた。

「へえ、サイズもピッタリだな。似合うよ」

「あ、あの？」

朝吹さんは困惑している僕の左手を握ったまま言った。

「桃田望君、僕と結婚してくれないか？」

「はあ！？」

このひと、今なんて言ったんだ？

第四話

「……あの、今なんて言いました？」

「その年でもう耳が遠いのか？結婚してくれと言ったんだ。僕の花嫁になつてほしい」

「は、花嫁？僕、男ですよ？」

「わかつているが、しょうがない。」

その指輪が、僕達の運命を決めたんだ」

僕は薬指にはめたままの指輪をマジマジと見た。

「なんなんですか？これ」

「その指輪は朝吹家の家宝で、代々朝吹家の花嫁に贈られるしきたりになつている。」

母親が5年前に亡くなつて以来預かつていたんだが、なかなか結婚しないんで、

怒った祖母に取り上げられてしまったんだけどね」

「家宝！？」

僕はビックリして指輪をはずそうとしたのだが、きつくて抜けない！！

何がピッタリだよ！

ギユウギユウに押し込んだくせに！

「僕は結婚なんてまだする気はなかったんだが、最近祖母の具合が悪くてね。」

自分が生きてる内に結婚してくれと、泣いて頼まれたんだ。

あの祖母のことだから、仮病にウソ泣きじゃないかと思つているんだが…。

面倒くさくなつて、祖母が決めた相手と結婚することにしたんだ。

それで、祖母が適当な花嫁候補をリストアップして花嫁選びのパーティを開き、

会場のどこかに隠されたその指輪を見つけ、正直に届け出たひとを僕の花嫁にすることに決めただ。

指輪が僕の花嫁を選んでくれるというわけさ。

祖母はロマンス小説の愛読者で、そういうロマンチックな趣向が大好きなんだよ」

「そんな無茶な。誰も反対しなかったんですか？朝吹グループの後継者の花嫁をそんな方法で選ぶなんて……」

「祖母はこの家では一番発言力があって、朝吹家の者は誰もあのひとは逆らえないんだ。

……それにしても、まさかそれを桃まんじゅうの中に忍びこませているとは思わなかったな。

確かに桃まんじゅうは祖母の大好物だが……。

とにかく、君が祖母に、いや指輪に選ばれた僕の花嫁ということになる。

曾孫の顔は見せてやれないが、そこまでは約束してないから男でも構わないだろう」

「む、無効です！僕は間違つてこのパーティに招待されたんです！あなたも嫌でしょ？男と結婚するなんて！」

「ああ、それは問題ない。僕はバイなんだ」

バイ？

男も女もいけるといふ、無駄に許容範囲の広いアレか？

「あなたには問題なくても、僕は嫌です！

なんであなたなんかと結婚しなくちゃいけないんだよ！」

僕が叫ぶと、朝吹さんの眼が鋭く光った。

「花嫁選びを祖母にまかせた以上、俺はそれに従わなければならぬい。」

こんな手は使いたくないんだが……」

突然彼の口調がガラリと変わった。

笑顔が怖い……。

「確か君の父上の会社は、朝吹グループ系列の会社と取引があったんだよね？」

……これ以上は言わなくても分かるだろう？」

取引を切るだけじゃないよ？と彼の目が語っている。

「そんな……」

僕は目の前が真っ暗になった。

「まあ、俺も鬼じゃない。

祖母の我儘で、君の一生を縛り付けるのはどうかと思うしね。

そうだな、1年俺と結婚生活をしてみて、お互いをよく知ろうじゃないか。

それでもどうしても我慢できなかつたら、離婚すればいい。

もちろんそうなくても、父上の会社には何もしないよ。

慰謝料も、1年間君の時間を拘束するんだから、充分なものを支払おう」

「……………」

この人との結婚生活なんて想像もできないけど。

1年……1年の我慢だ。

それで、お父さんの会社が無事なら……。

「わかりました……………」

僕は俯いていた顔を上げて、正面に立っている男の端正に整った顔を見た。

「契約成立だな？」

朝吹さんは満足そうに頷いて、僕の左手を掴んで引き寄せた。そして、元凶の指輪に唇を寄せた。

「君はたぶん祖母に気に入られると思うよ？」

彼は僕がテーブルの上に置いていた食べかけの桃まんじゅうを見て、ニヤリと笑った。

第五話

僕は今『朝吹紳一郎の花嫁』として、この朝吹邸にいる。

あのパーティの日から一ヶ月の間、僕達は甘い婚約期間を過ごした。……ということはもちろんなくて、仕事で忙しい彼とは数回短い時間に結婚の打ち合わせの為に会ったくらいだ。いつも秘書のひとと僕の両親が一緒に、ふたりつきりになることはなかった。

僕達の結婚話を聞いて、両親も姉もあたりまえだが凄く驚いた。紳一郎さんは一日でも早く僕をお嫁にもraitたいと、両親を力強く説得した。

彼の説明によると、僕と紳一郎さんはパーティで運命的な出会いをして、愛し合うようになり、離れられない仲になったそうだ……。

僕も『脅されてます』とは言えないから、仕方なく話を合わせた。彼は話ながら時々僕に向かって甘く微笑み、僕がそれに一々反応して顔を赤らめるので（なんでだ？）

両親はすっかりその話を信じてしまった。

姉の環は僕に何か言いたそうだったけど、結局何も聞かれなくてホッとした。

あの姉にしつこく追求されたら、僕は何もかも喋ってしまっただろう。

そして一ヶ月後、つまり昨日、僕達の結婚披露パーティが朝吹邸の大広間で行われたんだ。

と言ってもケーキ入刀もキャンドルサービスもない普通のパーティだった。

もちろん僕の衣装はドレスではなく、普通のタキシードだ。…色は白だったけど。

朝吹グループの御曹司の結婚なのだからもっと盛大にするのが本当だが、

僕が現役高校生であることに考慮して、世間にはまだ公表しないことになった。

…もっと別の問題があるんじゃないのか？

ちなみに今は6月なので、僕はジュースブライドの花嫁つてことになる。

彼のお父さんや親戚の人達は普通に祝福してくれた。相手が男の僕なのに、いいのかなあ。

朝吹のおばあさんの決めたことには逆らえないというのは本当みたいだ。

そのおばあさんは、パーティの席にはいなかった。

体調を崩しているそうで、どこかの別荘で静養しているらしい。

そのうち対面しなくちゃいけないんだろうけど、複雑だなあ…。

結婚したと言っても、僕はまだ17歳の高校生だ。

家庭に入って、専業主婦(?)になる訳にはいかない。

僕は紳一郎さんを見送った後、学校へ行く準備をする為に自分の部屋に戻った。

迷わないように、メイドさんに誘導されてけど…。

この広いお屋敷には、今までは紳一郎さんと使用人の人達だけが住んでいたそうだ。

朝吹のおばあさんは世界中にある朝吹家の別荘を転々としているそうで、ほとんどこの家には

帰らないらしいし、彼のお父さん、朝吹グループの社長さんは高級

マンションに女のひとといっしょに住んでいるそうだ。

……まあ、いろいろあるんだろうな。

お屋敷から学校までの道順をまだ覚えていないので、車で送ってもらい目立たない所で降ろしてもらった。

来週からバスか電車にしくちや。

自分の教室に向かっていると、誰かに後ろからポンと肩を叩かれた。

「おはよう、桃田。いや昨日から『朝吹』だったな？」

「先生！そんなところで言わないでください！」

現代国語の小沢先生だ。

偶然にも小沢先生は紳一郎さんの親しい友人で、昨日のパーティーにも出席していたんだ。

「ああ、学校では秘密なんだよなー。悪かった。

それにしても、あいつが結婚するって聞いてビックリしたんだけど、その相手がおまえだなんて二度ビックリだよ」

「せ、先生！声が大きいよ！」

さっきの『悪かった』はどこに行ったんですか？

「パーティーで運命的な出会いをしたんだって？」

朝吹のばあちゃん大喜びだろ？そういうの好きらしいからなあ。

今度、詳しく聞かせろよ？」

「……はあ、話せばいろいろと長くなるんですけど……言えません」

「ケチ。しかしあのプレイボーイが結婚ねえ……」

まあ、結婚前に遊びまくった男ほど、家庭に入ったら大人しくなるっていうから

おまえは心配するな、……って俺が言うのもなんだけど」

「紳一郎さんて、そんなに遊んでたんですか？」

「確かこの間までは、祇園の芸妓とナント力っていう女優とフランス人のモデルと……」

俺が知ってるのはそれくらいかなあ。

「……………えーと、そろそろホームルームの時間だな。おまえも急げよ！」

先生はそう言っただけで慌てて僕から離れていった。

「モモ！風邪大丈夫か？」

僕が教室に入ると、友達の岳史が駆け寄ってきた。

「……………うん。ちょっと熱出しちゃって、ずっと寝てたんだ。もう大丈夫だよ」

昨日とおとといは結婚の準備とパーティで、僕は風邪の理由で学校を休んだ。

まさか、本当のことは言えないよ。

この学園で僕の事情を知っているのは学園長と担任の先生だけだ。

……………あと小沢先生もいたんだっけ。

「岳史、休んでた間のノート、後で見せてくれる？」

「ああ、そういえば昨日の現国自習だった。小沢が知り合いの結婚式とかで、午後からいなかったんだ」

「……………ふーん」

「新婦は俺達と同じ１７歳だってさ。絶対、できちゃった婚だよな！」

「……………」

本当に熱が出そうだ。

第六話

「紳一郎様は今夜はお仕事で遅くなされると、秘書の方からお電話がありました」

今朝と同じ場所に迎えに来てくれた車で朝吹邸に帰ると、メイドさんが僕に言った。

今朝、『なるべく早く帰る』って誰かさんは言っ てなかったけ？

……結婚2日目でこれだよ。

普通の新婚夫婦なら喧嘩になるのかもしれないが、僕の場合は大助かりだ。

なるべく顔を合わせたくない。

おととも会ってないし、昨日のパーティも招待客の相手で忙しくて、ずっと一緒にはいたけどろくに話していない。

夜はすぐ寝ちゃったし、今朝はふたりともギリギリまで寝ていたの
で朝の準備でバタバタしてて

彼が出かけるときに少し話したただけだ。

僕はコックさんが用意してくれた食事を取り、メイドさんが用意してくれたお風呂に入って

紳一郎さんと顔を合わせない内に寝てしまおうと、早々とベッドに入った。

昨日の疲れも取れない内に、今日も朝から学校で疲れることが続いて僕はもうクタクタだ、

明日は土曜日で休みだから、ゆっくりできる。

「……………」

僕、紳一郎さんと結婚したのはいいけど、これからこの家で何した

らしいんだろう？

食事の支度もお風呂の仕度もお掃除もこの使用人の人達がやってくれる。

『家のことは何もしなくていいよ。人手はあるからな。』

君はまだ高校生だから、今まで通り学業に専念してくれ。ただし、俺の花嫁だという自覚は持っていてくれよ？』

紳一郎さんは結婚が決まってから僕にそう言ったけど…。

花嫁の自覚？

なんだかよくわからない。

僕は何か忘れているような気がしたのだが、考えるのに疲れてそのまま寝てしまった。

ベッドが大きく揺れたような気がした。

「冷たいな、普通夫の帰りが遅くなっても起きて待つてるもんだろ？新婚なんだから」

「ん？」

すぐ近くで男の声が聞こえて、僕は目が覚めてしまった。

眠い目を擦りながら声のした方を見ると、ワイシャツにネクタイを緩めた格好の紳一郎さんが、

僕の隣で、肘について横になっている。

「あ、お帰りなさい。お仕事お疲れ様でした。…オヤスミナサイ」

「こら、寝るんじゃない」

紳一郎さんは僕が頭から被った上掛けを引き剥がすと、上から覆いかぶさってきた。

「あの、重いんですけど……」

「……甘い匂いがするな。シャンプーか？」

彼は僕の髪に鼻を近づけて、クンクンと匂いをかいだ。

僕がお風呂に入る時に、メイドさんが『桃がお好きだと伺いましたので』

と言つて、桃の香りがするシャンプーやボディソープを用意してくれた。

僕は『桃まんじゅう』が好きだけで、特に桃にこだわってるわけではないんだけど…。

「ひゃ！」

紳一郎さんは、いきなり僕の首すじに顔を埋めた。
く、くすぐりたい！舐めるな！吸い付くな！

彼の手が腰のあたりで怪しい動きをしている。

こ、これはもしかして……。

すっかり忘れてたけど、花嫁さんの仕事にはこういうことが含まれているんだっ！

第七話

結婚3日目の朝が来た。

窓の外では、雀がチュンチュンと鳴いている。

……結論から言おう。

昨夜はあれ以上何もなかった。

ごめんなさい。

（誰に謝ってるんだ？）

あれから僕は覚悟を決めて、固く目をつぶってまな板の上の鯉の状態でいたんだ。

震えていたかもしれない。

すると紳一郎さんは、黙って僕の上から退くと寝室に備え付けのバスルームに行ってしまった。

鯉（マグロ？）状態の僕に呆れてしまったのだろうか？

よ、よかった……。

だって、やっぱり怖いよ。

会ってまだ一ヶ月の、それも男の人を相手にあんなことするなんて

しばらくして戻ってきた紳一郎さんはまたベッドに入ってきたけど、もう何もしないで眠ってしまった。

僕は緊張して起きてただんだけど、いつのまにか寝てしまってたらしい。

僕が目を覚ました時、紳一郎さんはすでにベッドにはいなくて、クローゼットのある隣の部屋で出かける準備をしていた。

僕はベッドの中から、開けたままのドアから見える紳一郎さんの姿

を盗み見た。

昨日のこと怒ってないかな？

僕の視線に気づいたのか、紳一郎さんはネクタイを締めながらベッドに近づいてきた。

あれも本当は僕ががやらなくちゃいけないんだよね。

昨日の朝、紳一郎さんにせがまれてやったのはいいんだけど、慣れないのと緊張したので力を入れすぎて

彼をネクタイで絞め殺しそうになったんだ。

『今の本気じゃないよな？』と怯えた顔で紳一郎さんに言われてしまった……。

「起きたのか？」

そう言つて、紳一郎さんが僕の頬に手を伸ばすと、僕はビクツと体を震わせてしまった。

ま、まずい！

「……そんなに、怖がるなよ。昨日は悪かったよ」

彼は困った顔をして僕に謝った。

「聞きたいことがあるんだが。」

その…君はああいうことは初めてなのか？」

「……………」

恥ずかしいことを聞かないで欲しい。

情けないことに僕は今まで女の子とも付き合ったことがないんだ。

紳一郎さんは、何も答えられないでいる僕を見つめながら、しばらく何かを考えていた。

「学校は今日休みだろ？」

そのまま休んでいいよ。見送りはいらないから」

紳一郎さんはそう言つて、僕を残して部屋から出て行ってしまった。

僕はしばらくぼんやりとベッドの上にいたのだが、慌てて起きて顔を洗いに行った。

仕事に向かう夫を見送るのは僕の役目なんだ！

昨日も失敗だ。

ちゃんと起きて待つてなくちゃいけなかったんだ。

僕が急いで着替えて、広い屋敷内を迷いながら玄関にたどり着くと、紳一郎さんを乗せた車はもう出てしまった後だった。

第八話

朝食を終えた後、メイドさんが僕の為に用意された勉強部屋に案内してくれた。

大きな机とパソコンと、本棚がいくつもあつて、ちょっとした書斎みたいだ。

本棚には僕が実家から持ってきた本が、ちんまりと並べられていた。

「はあ……」

昨夜や今朝のことを思い出して、勉強が手につかない。

紳一郎さんみたいに派手に遊んでる人（小沢先生情報）には、僕みたいな、何も知らないマグロ初心者には面倒くさいのかな？

うわの空で参考書を捲っていると、ノックの音がした。

「どうぞ」

返事をする、ドアが開いてメイドさんが大きなトレイを持って入ってきた。

「望様、お勉強は少し休まれて、お茶になさいませんか？」

「あ、ありがとうございます、えと……芦川さん」

この屋敷に來た時から、僕の面倒をいろいろと見てくれている若いメイドさんだ。

「あの、僕、何かお手伝いすることはありませんか？

お掃除とか……このお屋敷すごく広いから大変でしょう？」

僕は芦川さんが入れてくれた紅茶を飲みながら言った。

いくら家事は何もしなくてもいいと言われても、一日中ここで勉強をしてる訳にもいかない。

だいたいテスト前でもないのに、休日の朝から勉強なんてやりたくないよ。

「まあ… ともありません。私達が紳一郎様に叱られてしまいます」

「……それじゃあ、出かけてもいいですか？
行きたいところがあるんですけど」

「それでは、お車の準備を致しますわ」

「え？ そんないいです！ 駅までの道を教えてくれれば、電車で行きますから」

「望様、

望様は朝吹グループの次期社長夫人なんですよ？

電車など使われて痴漢に遭われたり、誘拐されたりしたら大変なことになるます！」

「はあ？ 痴漢はないと思うけど」

「いいえ！ こんなに可愛い方なんですもの！

望様の新妻フェロモンにムラムラツとした男達がフラフラ〜と…

ああ！ 想像しただけでも怖ろしいですわ！」

新妻フェロモン？

「そういえば、あの、起きられて大丈夫なんですか？

紳一郎様が、『望は今朝は疲れているから、まだ寝かせておくように』と言われて、出かけられたんですけど…。

昨夜は、よほど紳一郎様が激しくなさったんですねえ」

「は？」

「……まあ、私っちらはしたない！ 申し訳ありません！

あの、それでは、お車をご用意致しますわね？」

芦川さんは、真っ赤な顔で僕に謝ると、逃げるように部屋から出て行ってしまった。

僕は目的の店の前に立って、ガツカリした。

『しばらく休業いたします』の札がさがっている。

いつから閉まってたんだろう？

この一ヶ月バタバタしていて、ここ『モモタロ』に来ることができなかった。

『モモタロ』は僕のお気に入りのお桃まんじゅうを置いているお店で、毎週通っていたんだ。

小さいお店で、いつもおばあちゃんがお店番をしている。

通っているうちに話すようになって、仲良くなっただけ。

おばあちゃん、もしかして病気？

僕はおばあちゃんの顔を思い出して心配になってきた。

もしそうならお見舞いに行きたいけど、連絡先を知らないし…。

……おばあちゃんの笑顔を見て、癒されたかったんだけどな。

第九話

その日の夕方、紳一郎さんから今夜も遅くなるという連絡をもらった。

今夜こそ、起きて待っていないでは！

それからもし……もし今夜アレが始まったら頑張らなくては！

昨日みたいなマグロでは駄目だ！

怖いけど、花嫁である僕の務めなんだから。

……でも、どうやったらいいんだ？

「ん……？」

この香りなんだっけ？

いい香りだなあ……好きかも。

「望、そろそろベッドに行くか？」

いきなり耳元で囁かれた美声に、僕は鳥肌がたった。

「あ、あれ？」

いつの間に帰ってきたのか、隣に紳一郎さんが座っている！

僕、ソファで寝てた？

紳一郎さんの車が着いたら玄関に迎えにいくから教えてくれて、
芦川さんに頼んでおいたのに…。

「紳一郎さん、いつ帰ってきたんですか？」

「ん？30分くらい前かな？」

君の寝顔を肴に飲んでいたんだよ」

紳一郎さんは手に琥珀色のお酒が入っているグラスを持っていた。
もう一方の手は、なぜか僕の腰に回っている。

なんだか、すごく密着してる？

いい香りだと思ったのは、紳一郎さんがいつもつけているコロンの香りだったんだ。

「可愛いなあ。俺にもたれかかって、寝言をブツブツ言ってたぞ？」

「え？ 僕何言っていました？」

「マグロがなんとかって。」

「……好物なのか？ コツクに言って明日の夕食にでも用意させるよ」
「……」

「俺が帰るのを待っていてくれたのは嬉しいが、無理することはないんだぞ？」

夜更かしは美容に悪いからな。睡眠は充分にとらないと」

あのー昨日と言ってることが違うんですけど。

「悪いな、結婚したばかりなのに、ゆっくりできなくて。」

今仕事を立て込んでいて、しばらくの間早く帰れそうにないんだ。

明日も休めないし……」

夜は遅いし、朝は早いし、いつ休んでるんだろう？

なんだか、疲れてるみたいだ。

「僕のことは気にしないでください。あの…体に気をつけてくださいね？」

僕の言葉に、紳一郎さんはニツコリ微笑んだ。

「ありがとう。……先にやすみなさい。俺はもう少し飲んでるから」
「え……」

いいのかな？ お酒の相手をしなくても。

といっても僕はお酒は飲めないし、その前に未成年だ。

それに、今夜はアレはしないんだろうか？

「それじゃ…あの、おやすみなさい」

僕がそう言つてソファから立ち上がろうとすると、紳一郎さんがいきなり僕の腕を引っ張った。

「あつ！」

バランスをくずした僕は、彼の広い胸に倒れこんでしまった。

「……ファーストキスはいくつの時？」

僕の体を抱きこんだまま、紳一郎さんが言った。

「は？………な、何でそんなこと聞くんですか！」

「言えないってことは、まだなんだな？」

凶星だ。

だから、僕は今まで誰とも付き合つたことがなくて！

「ずっと男子校なんだろ？」

……その顔で今まで無事だったとは意外だな」

紳一郎さんはそう呟くと、ゆっくり顔を近づけてきて、僕の唇を塞いだ。

第十話

紳一郎さんは、唇を離して僕の顔をじつとみつめた。
人の顔をこんなに近くで見ると、初めてかも。

………つて、今、キ、キ……

頭の中で静かにパニックっていると、
目の前の紳一郎さんが何か言っ、また唇を近づけてきた。

その時、

テーブルの上に置いてあった紳一郎さんの携帯が鳴った。

「……………」

しつこく鳴り続ける携帯を、紳一郎さんはしばらく無視していたんだけど……。

「……誰だ？こんな時間に」

諦めたのかしぶしぶ携帯に手を伸ばし、相手を確認めて眉を顰めた。
そして、通話ボタンを押すと、外国語で話し始めた。

………これって、フランス語？

紳一郎さん、フランス語喋れるんだ。さすが御曹司（？）

……………待てよ？

そういえば昨日小沢先生が、紳一郎さんはフランス人のモデルと付き合ってたって言っ、なかったっけ？

もしかしたら、電話の相手はそのひと？

………なんだかおもしろくない。

僕は胸の中がモヤモヤしてきた。

「お言葉に甘えて、先にやすませてもらいます。おやすみなさい」
僕は聞こえるか聞こえないかの小さな声で挨拶をして紳一郎さんから離れると、ドアへ向かった。

名前を呼ばれたような気がしたのだが、振り返らなかった。

結婚したからっておつき合いをやめたわけじゃないんだな。
何が家庭に入ったら大人しくなる、だよ。

小沢先生のウソツキ。

…… 紳一郎さん達の世界では、愛人をつくることなんてあたりまえ
だったりにして。

ベッドに横になってしばらくすると、紳一郎さんが寝室に入ってきた。

「…… 望、寝たのか？」

僕は返事をしないで、寝たフリをした。

今はなんだか話をしたくないんだ。

紳一郎さんは溜息をつくとき、バスルームに行ってしまった。

「……………」

僕はベッドの中で、紳一郎さんの唇の感触を思い出した。
今更だけど、ドキドキする。

紳一郎さんにキスされてしまった。

普通ファーストキスって、甘いとか聞くけど。

僕のファーストキスは、お酒と煙草の香りが入り混じった大人のキスだった。

朝、目が覚めると、昨日と同じく紳一郎さんはもうベッドにはいなかった。

「起こしてくれたらいいのに……」

ベッドから降りて、顔を洗いに行こうとしたら、寝室のドアが開い

てスーツ姿の紳一郎さんが入ってきた。

「おはよう、望」

「おはようございます……」

昨日のキスのことを思い出して、まともに顔が見れない。

「望、これ」

紳一郎さんは僕に、持っていた薔薇の花束を差し出した。

「さっき温室で選んできたんだ。やっぱり君には薄いピンクが似合うな」

「はあ……」

寝起きの頭では、どういうリアクションをしたらいいのかわからない。

僕はぼんやりとそれを受け取り、目をつぶって甘い香りがする花の匂いをかいだ。

……いや、なんとなく。

「……そんな可愛いことするなよ」

「え？」

顔を上げて紳一郎さんを見ると、複雑そうな顔をしている。

彼は僕から花束を取り上げると、それをベッドの上に放り投げ、僕の体を強く抱きしめた。

そして、昨日よりもずっと長いキスをした。

「昨日も言ったが、しばらくは帰りが遅くなるんだ。

無理して夜中まで俺のことを待っていないくてもいいんだぞ？

もう少ししたら時間が出来ると思うから、その時は……」

紳一郎さんは、ぼうつとしている僕に向かって甘く微笑むと、

「覚悟しろよ？」

そう言って、寝室から出て行ってしまった。

結局、

僕は仕事に向かう紳一郎さんを、今日も見送ることが出来なかった。
この広いお屋敷を、迷わないでひとりで玄関まで行けるようになる
のはいつのことだろう……。

第十一話

紳一郎さんの仕事は相変わらず忙しいらしくて、帰ってくるのはいつも真夜中過ぎだ。

待っていてもいいと言われてしまったので、僕だけ先にやすませてもらっている。

なので、顔を合わせるのは朝の短い時間だけだった。

同じベッドで一緒に寝てはいるが、キス以上のことはなんにもない。
……キスだけでも僕はドキドキなんだけど。

電車通学は紳一郎さんからも却下され、迎えに来てくれた車で学校から帰ると

お客さんが僕を待っていた。

「アンリ・ジャンティル様です。紳一郎様の名刺をお持ちでした。秘書の方からも連絡がありまして、お約束なさってるそうです。望様にもお会いしたいと仰ってるんですが……」

紳一郎さん、今朝は何も言っていなかったけど……。

今日は早く帰ってくるのかな？

僕はそのままお客さんのいる応接室に案内された。

応接室に入ると、その人は座っていたソファから立ち上がった。

そして、僕の方に近づいてくる。

上品なデザインのスーツを着た、金髪に青い瞳の綺麗な男の人だ。
……『貴公子』ってこういうひとのことを言うのかも。

ぼうつと見惚れていると、彼は僕の正面に立って微笑んだ。

「初めまして、ノゾミさんですね？ アンリ・ジャンティルですよ。よかった。日本語だ。」

「初めまして、桃……朝吹望です」

お辞儀をすると、彼は僕に向かって手を差し出した。
握手？

そうか、外国のひとだもんね。

で、握手をしたんだけど……。

長い……。

アンリさんが手を離してくれない。

困って顔を見ると、彼はなぜか僕の手をじーっと見ている。

「あの？」

「んー。可愛い手だなあ。すべすべしてて、指も綺麗だし。爪も桜貝みたいだ」

彼はそう言っ、いきなり僕をガバツと抱きしめた。

「わっ！」

「うん、いい抱き心地。細い腰だねえ。激しくすると壊れちゃいそうだなあ。」

シンイチロウは優しく抱いてくれる？」

「え……ええっ？ な、何を……！ は、離してください！」

僕はジタバタと暴れたんだけど、体はがちりと彼の腕に拘束されていて逃れられない。

「顔も可愛いし……唇はどんな味かな？」

アンリさんの綺麗な顔がどんどん近づいてくる。

キ、キスされる？
誰か助けて！
紳一郎さん！

第十二話

「望様！」

唇を死守しようと、必死に顔をそむけていると、メイドの芦川さんが僕達の間飛びこんできて、僕をアンリさんから引き離してくれた。

「申し訳ありません。私がついていながら……」

芦川さんは僕をギュツと抱きしめて言った。

「美形外人が嫌がるカワイコちゃんに襲い掛かる図なんてめったに見られないと思って、ついウツトリ……いえ、その」

見てたんなら、早く止めてよ！

「無礼者！」

芦川さんは、僕を抱きしめたままアンリさんに向かって叫んだ。

「このお方をどなたと心得る！」

天下の朝吹グループの後継者、『朝吹紳一郎』の奥方様ですよ！

こんな不埒な真似をして……。

ええい！頭が高い！ひかえおろう！」

「……『ヒカエオロウ』ってどういう意味？」

僕、五ヶ国語話せるけど、日本語が一番苦手なんだよね」

空気が読めないのかわざとなのか、アンリさんは無邪気な顔で首を傾げた。

「黙りなさい！さあみんな！この男を取り押さえるのよ！」

「はい！」

騒ぎを聞いて集まって来た何人ものメイドさんが、芦川さんの声に一斉に返事をした。

嬉しそうに聞こえるのは気のせいだろうか？

「何の騒ぎだ？」

その時、低い男の声がした。

いつの間に帰ってきたのか、ドアのところに紳一郎さんが立っている。

秘書の人も一緒だ。

「……君達は何をしているんだ？」

紳一郎さんは僕と芦川さんを見て、眉を顰めた。

「離れなさい」

不機嫌そうな声だ。

「申し訳ありません！」

芦川さんは、慌てて僕の体を離して、さっきの出来事を紳一郎さんに話した。

黙って聞いていた紳一郎さんの顔が、どんどん険しくなる。

「アンリ……貴様」

紳一郎さんは、アンリさんを睨みつけた。

そして、拳を握り締めてアンリさんの正面に立った。

まさか……

な、殴っちゃうの？

紳一郎さんの手が上がるのを見て、僕は思わず目を瞑った。

「いひやいよ、ひんいひろっ……」

妙な声が聞こえて、恐る恐る目を開けると、

両方の頬つぺたを、紳一郎さんの手で思いつきり引っ張られているアンリさんの姿があった。

……美貌が台無しだ。

第十三話

「まだヒリヒリする。あんなに思いつきり引つ張ることないじゃないか。」

僕のこの美しい顔にこんな事が出来るのは、世界中で君だけだよ？
シンイチロウ」

アンリさんは冷たいタオルを頬にあてて、ブツブツと文句を言っている。

「それだけですんで良かったと思え。」

俺が帰るのがもう少し遅かったら、もっとひどい目にあっていたらかもしれないぞ。

うちのメイドは、ほとんどが剣道や空手の有段者だからな。
屋敷内の道場やトレーニングルームで毎日鍛えてるはずだ」

このお屋敷、道場まであるの？

知らなかった……。

「……まあ、いいか。」

本当はちよつとドキドキしたんだ。

いつもは絶対に触らせてくれない君のセクシーな長い指が、ずっと僕の頬に触れていたんだから。

……かなり痛みを伴ったけどね」

僕の隣に座っている紳一郎さんを窺がうと、すごく嫌そうな顔をしている。

「望、目を合わせるんじゃないぞ。こいつは男の手や指に欲情するヘンタイなんだ」

「シンイチロウ！そんな言い方はないだろ？

まあ、否定はしないけどね」

しないのか。

つまりアンリさんは手フェチの人なんだ。

そういえば抱きつかれる前に、僕の手をジロジロ見てたっけ。

危険なひとだなあ。

なるべく近づかないようにしなくちゃね。

「さっきはゴメンね、ノゾミ。

でも、あんなのは僕の国フランスでは普通の挨拶なんだよ？」

「はあ……」

ホントか？

「君も何か護身術を習ったほうがいいかもしれないな。

芦川君に言って……いや、若い女性はマズイか」

「あ、岳史が柔道をやってるから、教えてもらおうかな」

「……岳史って誰だ？」

「一番仲のいい友達です。柔道部に入ってる、

僕、必ず試合の応援に行くんですけど、とっても強くてカッコイイ

んです！」

「……」

紳一郎さんはなんだかムツとした顔をしている。

僕、何か変なこと言った？

「ダメだよ？ノゾミ。シンイチロウの前で他の男のこと褒めちゃあ。

それとも、妬かせるためにワザと言ってるの？小悪魔クンだなあ。

シンイチロウのハートを射止めただけのことはあるね」

アンリさんがニヤニヤしながら僕に言った。

「黙れ、アンリ」

「え？僕、そんなつもりじゃ……」

紳一郎さんが嫉妬なんかするわけじゃないか。
別に僕のが好きで結婚した訳じゃないんだから。
あの指輪のせいなんだから……。
あれ？悲しくなってきた。なんで？

このひとが変なこと言うから……。

僕は目の前でニコニコしているアンリさんをちよつと睨んだ。

それにしてもアンリさんでどういうひとなんだろ？

紳一郎さんとは随分親しいみたいだけど。

綺麗な人だけど、モデルさんだろうか？

フランス人なんだよね。

フランス？

「……………」

僕は、初めて紳一郎さんとキスをした夜にかかってきた電話を思い出した。

もしかしたら……

「アンリさんって紳一郎さんの愛人？」

第十四話

紳一郎さんが、飲んでいたコーヒをブーッと吹き出した。
もろにそれを浴びたアンリさんが立ち上がって何やら叫んでいる。
たぶんフランス語だ。

「だ、大丈夫ですか？」

紳一郎さん、急にどうしちゃったんだろう？

「ひどいよ、シンイチロウ。僕のこの美しい顔にこんなことが出来るのは、世界中で君だけだよ？」

アンリさんはプンプンしながら、さっきまで頬を冷やしていたタオルで顔を拭った。

紳一郎さんは咳き込みながらアンリさんに謝っている。

「悪い、ゴホッ、望が…ヘンなこと…ゴホッ…」

「え？僕？」

「なんでアンリが俺の愛人なんだ！

どこからそういう発想になるんだ？冗談じゃないぞ！」

……つい、思ったことを声に出して言ってしまったらしい。

紳一郎さんは腕を組み、怖い顔で僕を睨んでいる。

「だって…小沢先生が」

「小沢？あいつが何を言ったんだ？」

「……紳一郎さんはプレイボーイで、ついこの間までフランス人のモデルさんと付き合っていたって。

あと、女優さんと芸妓さんと……他にもたくさんいるんでしょ？」

なんだか尖った声になってしまった。

嫌だなあ。

まるでヤキモチやいてるみたいだ。

「……余計な事言いやがって。

確かに君に会うまでは、何人が付き合っていたよ。

だが、君との結婚が決まってからは全員と手を切った。

あたりまえだろう？俺がそんな不実な男だと思うのか？」

「……………」

「ねえ、いつぺんに何人もの恋人と付き合うのは、不実って言わないの？」

「おまえに言われたくないぞ。

俺は自分から誘ったことはないし、むこうから勝手に寄ってくるんだ。

俺を独占することは出来ないし、お互い遊びでいいんならって、最初にちゃんと断ってから付き合ってるよ」

アンリさんが僕の方をチラッと見た。

「シンイチロウ……自分で墓穴掘ってるってわかってる？」

「……………」

「だいたい、別れること、みんなちゃんと納得してんの？」

この間マリーに泣きつかれちゃったよ。なんで急にシンイチロウに振られたのかわかんないってさ」

「ああ、何度も電話があったよ。あんなにしつこい女だとは思わなかったな」

紳一郎さんは、冷たい声で言った。

紳一郎さんって……結構……最低だったりして。

微妙な顔をしていたんだろう。

紳一郎さんは僕を見て、気まずそうな顔をした。

「望。俺には君がいるのに、愛人なんてつくるはずがないだろう？
君だけだ」

僕をまっすぐに見つめる紳一郎さんの瞳は、とても真剣に見えるけど……。

第十五話

僕に嫌われたら面倒なことになるから、ご機嫌を取る為にそんなこと言っのかなあ……。

僕は、紳一郎さんの言葉を素直に信じる事ができなかった。

「そうですか。」

アンリさん、そのタオル取り替えてもらいましょうか？

ほつぺた、まだ赤いですよ？」

「え？ああ、シンイチロウのせいで汚れちゃったしね。頼もつかない？」

「……サラツと流すなよ。確かに出会いはあんな形だったが、俺は」

「何？何？」

君達って、どうやって知り合ったの？」

アンリさんが紳一郎さんの言葉を遮って身を乗りだした。

「こんなに可愛い男子高校生と知り合うにはどうしたらいいの？
ぜひ、教えて欲しいなあ。」

出会い系サイト？それとも、デートクラブとか？

もしかしたら、援助交際が愛に発展したんだったりして……」

「え、援助交際？」

「……おい、望を侮辱するな」

紳一郎さんの冷たい声に、アンリさんは固まった。

「シ、シンイチロウ、そんなに怖い顔しないでよ。」

冗談に決まってるじゃないか……。あ！またジンジンしてきた」

アンリさんは誤魔化すように言って、タオルで顔を覆った。

「コーヒークさい……」

冗談にしてもひどいよ。

確かに大企業の後継者の紳一郎さんが、只の高校生の、それも男の僕と結婚するなんて不自然だけど。僕が花嫁に選ばれた理由は朝吹家の一部の人達しか知らないから、変に思う人は多いんだろうな……。

もし、あの桃まんじゅうを食べて指輪を見つけたのが他のひとだったら、

紳一郎さんはそのひとを花嫁に迎えていた筈なんだ。

朝吹のおばあさんが決めたひとなら、誰だって良かったんだよね。僕じゃなくても……。

「望、何を考えているんだ？」

「別に……」

押し黙った僕を見て、紳一郎さんはもう一度アンリさんを睨みつけた。

「シ、シンイチロウ！」

本題に入ろうじゃないか。

とりあえず、いくつか選んで持ってきたんだけど。

やっぱり特別にふたりの為にデザインした物の方がいいんじゃないのかなあ」

何のこと？

「俺達の結婚指輪だよ。

アンリは、ジュエリーデザイナーだ。……只の知り合いで、変な関係じゃないぞ？」

「結婚指輪？」

そういえば僕は結婚指輪を持っていない。

男同士で教会で式を挙げるのは難しいらしくて、僕達は結婚パーティしかしなかったんだ。

従って指輪の交換とかもなく、特に必要なかったんだけど……。

パーティの時は、例の家宝の指輪をはめさせられたんだっけ。

「君達の美しい指を、僕がデザインした指輪で飾ることが出来るなんて

考えただけでゾクゾクするよ……」

アンリさんが目を閉じてうっとりと言った。

……紳一郎さん、人選を誤ったんじゃないの？

第十六話

僕達は、アンリさんが持つてきた数種類の指輪を見せてもらった。何の飾りもないシンプルなものから、小さな宝石が埋め込まれているものまである。

「望、君はどれがいいんだ？」

「え？……僕、指輪ってよくわからなくて…… 紳一郎さんが選んでください」

「……そうだな。これなんかいいんじゃないか？」

紳一郎さんが選んだのはシンプルなデザインの指輪だった。

「えー。それにするの？つまらないなあ。」

僕にまかせてくれよ。君達の為に最高のマリッジリングをデザインするから。

それで……よかったら君達の手の写真をとらせてくれないかな？

あ、できたら型も取らせて欲しい。イメージを膨らませるのに必要なんだ！」

アンリさんはソファから身を乗りだして、紳一郎さんに訴えた。

僕は、アンリさんが紳一郎さんの手を形どった石膏に頬擦りする怖い姿を一瞬想像してしまった。

「断る」

紳一郎さんは冷たい声でアンリさんに答えた。
だよね。

「そんなあ」

アンリさんは、しばらくの間いろいろと理由をつけて紳一郎さんに哀願していたけど無駄に終わった。

結局、結婚指輪は最初に紳一郎さんが選んだ物に決まった。

「それじゃあ、裏に入れるのはイニシャルと日付だけでいいんだね？
出来上がったら、連絡するよ。」

それにしても、シンイチロウがいきなり結婚だなんて、連絡もらって驚いたよ。

水くさいなあ。何で教えてくれないんだよ。結婚パーティにも出たかったのに。

リュウも何も言っていなかったんだよ？」

アンリさんから出た名前に紳一郎さんの表情が変わった。

「龍二に会ったのか？」

「うん、半月くらい前かな？パリでね。彼、春から向こうを任されてるんだって？」

「……アンリ、俺の結婚のことは、望が学生の間はなるべく公にしたくないんだ。

だから君もこのことは伏せておいてくれ。龍二にも何も言わないでいてくれないか？」

「え？彼、知らないの？一応従弟でしょ？結婚パーティには呼ばなかったの？」

「ああ、親戚連中にも口止めしておいたよ。絶対にあいつには知らせるなってね」

「……うーん、それは正解かもね。」

リュウって、シンイチロウの恋人を寝取るのが趣味だから、もしかしたらノゾミも危ないかも……。

奥さんだからって遠慮するとは思えないなあ。それどころか知ったら俄然やる気だすかもね。

彼って口がうまいから、皆騙されちゃうんだよね。まあ飽きたらポイされるけどさ」

「……あいつは昔から俺の嫌がることをするのが大好きなんだ。
今までは見て見ぬ振りをしてきたが、望にまでちょっかいだされるのはごめんだ」

紳一郎さんは不愉快そうに言った。

な、なんか今『寝取る』とか、『飽きたらポイ』とか聞こえたけど……。

その龍二さんってひと、最低だなあ。

紳一郎さんは、まだましなほうなのか？

「まあ、ばれるのも時間の問題かもしれないけどな。

とにかく今は俺達のことを誰にも邪魔されたくないんだ」

紳一郎さんは僕の方を見ながら言った。

「リュウはバイじゃないから、今まで狙うのは女性ばかりだったけど……」

ノゾミは女の子みたいに可愛いし、油断は禁物だ！

ノゾミ、君はシンイチロウの大事な『オクガタサマ』なんだから、

他の男に絶対に隙を見せたらいけないよ？

いいね？」

「……………はい」

第十七話

「失礼致します」

ノックの音がしてメイドさんが入ってきた。

「紳一郎様、秘書の方はお車でお待ちになるそうです」

「……ああ、時間か。」

悪いが、今から社に戻らなければならないんだ。

今夜も遅くなるだろうな……」

紳一郎さんは腕時計を見て、溜息をついた。

なんだ。

また会社に戻っちゃうんだ……。

あれ？なんだろう、このガツカリ感は。

「あいかわらず、忙しそうだねえ。

ちよつと痩せたんじゃない？」

「ここ一ヶ月、スケジュールが目一杯詰まってるんだ。

おかげで、望と過ごす時間が全然とれない。

秘書に文句を言ったら、いきなり結婚を決めたりするから調整がで
きなかつたんだと怒られたよ。

……まあ、来月ぐらいには余裕が出来るだろう。

さて、行くか。

アンリ、もう用事は済んだからおまえもさっさと帰れ」

紳一郎さんが手で追い払う仕種を見ると、アンリさんは唇を尖らせ
た。

「冷たいなあ。

もっとノゾミと話したいのに……。

そつだ、ノゾミ、庭を案内してくれない？

朝吹邸の庭と温室は、海外でも有名なんだよね」

「え……僕がですか？」

無理だ。

この間、庭師のひとに案内してもらったけど、

ここのお庭は植物園みたいに広くて、どこをどう歩いたのか全然覚えてない。

「何考えてるんだ。図々しい奴だな。駄目に決まってるだろう！」

「……やっぱり駄目か。」

わかつた。今日は諦めるよ。

ノゾミ、会えて嬉しかったよ。

ああ、そつだ。今度、朝吹家の家宝の指輪を見せてくれないかなあ。もちろん結婚パーティーではお披露目したんだよね？

最高級のダイヤモンドで、噂によると軽く億の値がつくとか」

「お、億！？」

家宝の指輪なんだから高いんだろうなーとは思ってたけどそんなに
するの？

そんな高価なものを桃まんじゅうなんか忍び込ませるなんて、
なくしたらどうするんだよ。

朝吹のおばあさんってチャレンジャーだなあ。

うっかり飲み込んだりしないでよかった。

紳一郎さんが立ち上がったので、僕もつられるようにして立った。
ちゃんとお見送りしないとね。

「ああ、見送りはいいよ。まだ着替えてもないじゃないか。」

今日はこんなヘンタイ男につきあわせて悪かったな」

紳一郎さんはそう言っただけで僕の頬を優しく撫で、唇を重ねてきた。

アンリさんが目の前にいるのに！

メイドさん達もまだこの部屋にいるんだよ！！

焦っている僕をよそにキスはどんどん深くなっていく。

窒息しちゃうよ！

紳一郎さんがやっと唇を離してくれた時には、僕はもう失神寸前だった。

「君達くみせつけないでくれよ」

「うらやましいだろ？おまえも早くまともな人間になって嫁をもらうんだな。」

それじゃ、望、行ってくるよ」

「また会おうね。ノゾミ」

紳一郎さんとアンリさんは応接室から出ていってしまった。

僕はまたソファに座りこんでしまった。

ただでさえ紳一郎さんにキスをされると、頭の中がふわふわして、胸がドキドキするんだ。

それなのに、あんなハードなキスをされたら、体中の力が抜けちゃって……。

「……………」

僕は、この結婚を1年間我慢したら、さっさと離婚して実家に帰るつもりだった。

だって、紳一郎さんは僕を脅して結婚を強要するこわいひとなんだ。そんなひと、好きになるはずがないと思ったんだ。

でも……。

朝の短い時間にしか紳一郎さんと会えないのはなんだか淋しいなと思ったり

抱きしめられたりキスされたりするとドキドキしたり

紳一郎さんと付き合っていたひとのことが気になったり

これって……

もしかしたら僕、紳一郎さんのこと好きになっちゃったのかな？

第十八話

「あれ？モモ、弁当食わないのか？」

「うん、なんか食欲なくて……。今日は牛乳だけにする。」

「岳史、これ食べてくれない？」

「いいのか？へえ、うまそう。」

「……おまえの弁当、最近豪華だよなあ」

「……そうかな？」

毎朝、朝吹邸のコックさんが作ってくれてるからね。

それなのに、岳史にあげちゃってごめんなさい。

でも、残すのも悪いし、捨てるなんてもっと悪いもんね。

牛乳のストローを銜えたままぼうつとしている僕を見て、岳史が怪訝そうな顔をした。

「……おまえ、最近変だぞ？」

ぼんやりしていることが多いし、おまけに食欲がないだって？」

岳史はそこまで言うてにやつと笑った。

「はーん。わかった。恋煩いだろ？」

「……………」

自分の顔が赤くなるのがわかった。

あの日。

自分の気持ちを自覚して以来、僕は変なんだ。

紳一郎さんの顔が、見られなくなってしまった。

意識しすぎちゃうっていうか、話しかけられてもまともに答えられないし、

朝のキスの時も、前よりずっと緊張してカチンカチンになっちゃう

んだ。

……紳一郎さん、僕のこと変なヤツだと思ってるだろうな。

「なあ、どんな娘なんだよ」

「誰が？」

「おまえの恋煩いの相手だよ。可愛いかな？」

「可愛いっていうか……カッコイイかな？」

「カッコイイ女？年上か？環さんの友達とか？」

「えーと……」

「桃田！先生が呼んでるぞ！」

「え？」

クラスメートに呼ばれて声のした方を見ると、担任の山口先生が僕に向かって手招きをしてる。

「何だろ？」

席を立て先生の傍まで行くと、先生は周りに聞こえないような小さな声で僕に言った。

「今から応接室に行ってくれ。学園長専用の方だ」

「は？」

「おまえにお客さんだ。朝吹家の関係者の方らしいぞ」

朝吹家の？

誰だろ？

……まさか、おばあさんじゃないよね？

僕はドキドキしながら、急いで応接室に向かった。

応接室のドアをノックすると、中から返事が聞こえた。

「失礼します……」

おそろのおそろドアを開いて中に入る。

朝吹邸ほどじゃないけど、広くて立派な応接室だ。
学園長専用だもんね。

応接室のソファーには、スーツ姿の若い男性がひとりで座っていた。
……学園長はいないみたいだ。

「学園長には席をはずしてもらったよ。
君とふたりきりで話をしたくてね」

男性はそう言つてソファーから立ち上がると僕の前まで来た。
近くで男性の顔を見て、僕の胸はドキンと鳴った。
このひと……紳一郎さんに似てる？

「初めまして、朝吹望君。
香月龍二です。」

一応、朝吹紳一郎の従弟なんだけど……
結婚パーティーには出席できなくて残念だったな」
彼はにつこりと微笑み、僕に向かって手を差し出した。

第十九話

香月龍二。

……………龍二？

この間紳一郎さん達が話してた『寝取ってポイ』のひと？

僕は差し出された手を見た。

アンリさんの時と同じパターンだよね。

数日前の嫌な記憶が甦る。

まさかこんなところで変なことはされないと思うけど…………。

ためらっていると、香月さんは自分から僕の手を取った。

そして、外国の女のひとにするように唇を押し付けてきたんだ。

「わあっ！」

僕は慌てて自分の手を取り戻した。

そんな僕を見て、香月さんはくすくす笑っている。

「顔が真っ赤だよ？ウブなんだなあ。

君、本当に17歳？

紳一郎が男子高校生を花嫁にしたっていうから、もっと大人っぽくて色っぽい子を想像してたよ」

色っぽい男子高校生ってどんなんだよ……………僕には想像できないよ。

「立ち話もなんだし、座ろうか？」

僕は香月さんに促されてソファに座った。

「そんなに脅えた顔しないで。
昨日までフランスにいたので、つい、ね。
あんなのは向こうでは普通の挨拶なんだよ？」

ホントか？

アンリさんとおんなじこと言ってるよ。

それに普通は男相手にあんなことしないよ！

このひと、何しに来たんだろう……。

僕をわざわざ呼び出したりして何を話すつもり？

「どうぞ」

どんな態度をとったらいいのかわからなくて黙っていると

香月さんは、テーブルに用意されていた紅茶をカップに注いで勧め
てくれた。

「あ、ありがとうございます。……すみません」

……お客さんにお給仕をやらせてしまった。

僕、朝吹邸で暮らすようになってから、なんでもメイドさんにやつ
てもらうのがあたりまえになってた。

いけないよね……。

申し訳なくて小さくなっている僕を見て、香月さんはクスリと笑っ
た。

「どういたしました」

「……………」

僕は香月さんの柔らかい笑顔に、つい見惚れてしまった。
だって、笑うともっと似てるんだ。

重症だ。

紳一郎さんに似ているひとを目の前にしただけでときどきするなん
て。

香月さんは紅茶をひと口飲んで、じつと僕の顔を見つめた。
思わず身構えてしまう。

「急に訪ねてきたりして悪かったね。」

あの紳一郎が結婚したって聞いて、どうしても花嫁に挨拶したくてさ。

どういうわけか、結婚パーティには招待されなかったんだよなあ。

どうしてだと思っ？」

「……………」

僕に聞かれても……………。

それはあなたが『寝取ってポイ』のひとだから、紳一郎さんが警戒してるんです……………

なんて言えないよ。

第二十話

「わざわざフランスから僕を呼び寄せるのも悪いと思ったのかなあ。でも、報告ぐらいしてくれてもいいのにね？あいつとは従兄弟同士で、

子供の頃からの付き合いなのに」

「……………」

返事することが出来ないしていると香月さんは小さく笑った。

「さつきからマユゲがハの字になってるよ？」

困らせちゃった？君は思ったことが顔に出るんだね、素直で可愛いなあ。

気に入ったよ」

いえ、気に入ってもらわなくても結構です！！

「紳一郎がうらやましいよ。

こんな可愛い子を花嫁にするなんてさ。

で、あいつとはどうやって知り合ったの？

どうして、そんなに急いで結婚したの？

君はまだ高校生なのに、学校を卒業してからでも遅くはないんじゃないの？」

続けざまに困った質問をされて、僕はますます窮地に追い込まれてしまった。

紳一郎さん作の、僕達が結婚に到るまでの物語（僕の両親に話したヤツだ）を

話せばいいんだろうけど、僕は嘘をつくのは苦手なんだよ。

それに、人が良くてちょっと単純なうちの両親と違って、このひとには通用しないような気がする。

「言えない理由でもあるのかな？」

まあ、無理には聞かないけどね。

……でも、男の子を朝吹家の花嫁に選ぶなんて紳一郎も思い切ったことをするなあ」

やっぱりみんなそう思うよね……。

「次の後継者はどうするつもりなんだろうな。君、何か聞いてる？」

後継者？

そうか、今は紳一郎さんが朝吹グループの後継者だけど、その後は紳一郎さんの子供が継ぐのが当たり前だよな。

「ああ、愛人に産ませるという手もあるか。……ごめん、嫌なことを言ったね」

「紳一郎さんは、愛人はつくらないって言ってました。……ぼ、僕だけだった」

「……望君。」

こんなことを言うのは可哀想だけど

覚悟はしておいた方がいいよ？

今はまだ親戚連中は何も言わないだろうけど、何年か後にこの問題は必ず出てくる。

本家の血筋を絶やさないように努めるのは、朝吹家の長男である紳

一郎の義務だ。

君が相手では無理だろう？」

「……………」

「あいつが、そんな大事なことを忘れている訳がないと思うんだけどな。」

……君達がという経緯でスピード結婚することになったのかは知

らないけど、

紳一郎のことを好きだから結婚したんだよね？

あいつが他の女との間に子供をつくることになっても平気でいられるかい？」

僕は香月さんの質問に答えられなかった。

「……僕は君が傷付くを見たくないな」

紳一郎さんは、後継者のことなんて何も言わないけど。

大事なことだね。

もし、この先紳一郎さんが後継者のことを考えて誰かを愛人にしても僕、何も言う権利はないんだ。

……僕は女の子じゃないから。

第二十一話

「……弱ったな。望君、大丈夫？」

気遣うような声がごく近くで聞こえた。

「すまない。僕の言ったこと、そんなにショックだった？ 顔色が悪いよ？」

香月さんは心配そうに、僕の顔を覗き込んだ。

ぎょっとして思わず体をひいてしまう。

紳一郎さんに似ている顔でそんなに接近しないでほしい。

って、さっきまで正面にいたのに、いつの間に僕の隣に移動してるんだよ！！

「望君？」

香月さんは固まっている僕の名前を呼んで、慰めるように（？）肩に腕を廻してきた。

……さっきから思ってたんだけど、このひと紳一郎さんと同じ香りつけてるよね？

そのせいなのか、体に力が入らない。

は、離れなくっちゃ！

……と思ってるのに、香月さんの腕の力が強くて動けないよ。

『君はシンイチロウの大事なオクガタサマなんだから、他の男に絶対に隙を見せたらいけないよ？』

アンリさんがせっかく忠告してくれたのに、僕ってヤツは！

「こ、香月さん！あの、離れてくれませんか？」

「……君、甘い香りがするね」

そう言つて、香月さんは僕の顎をすくい、顔を近づけてきた。

アンリさんの時と同じパターンじゃないか！

ううん、あの時よりもっとまずい状況だよ。

助けてくれる芦川さんもない！

「おーい。それはちよつとシャレにならないんじゃないの？」

その時、からかうような男の人の声が聞こえた。

声の主を探すと、腕組をした小沢先生がドアの前に立っている。

「せ、先生！」

香月さんの腕の力が抜けて、僕は慌ててそこから逃げ出した。

「ノックの音は聞こえませんでしたけどね……」

「あ、忘れてた」

小沢先生はそう言つてコンコンとドアをノックした。

「相変わらずですねえ、小沢先輩」

香月さんが溜息をついた。

「教師になつたとは聞いてましたけど、この学校にお勤めだったんですか。」

一流の大学を首席で卒業したのにもつたいないって、皆が言つてますよ。

お父様の会社は継がれないんですか？」

「ふん、面倒くさい。」

教師になるのはガキの頃から決めてたんだ。

俺はこの学校を卒業して偉くなった教え子達に、同窓会でチャホヤされるのが夢なんだよ！

財界や政界で大物になつた教え子達が、ヨボヨボのじーさんになつ

た俺に感謝の言葉を伝えるんだ。
俺はシワシワの顔に涙を零し……」

「あゝ。先生、僕、教室に戻っていいですか？」

将来の夢を熱く語る小沢先生に、僕はオズオズと声をかけた。

「おっと。そんな話はどうでもいいんだよ！」

おい、こいつは紳一郎の大事な花嫁なんだ。

手なんか出したら、紳一郎に殺されるぞ？」

「そうかなあ？」

紳一郎の恋人達とは僕も仲良くさせてもらいましたけど、いつも涼しい顔してましたけどねえ」

「……そいつらとは、本気じゃなかったからだよ」

香月さんは僕の方に視線を向けた。

「へえ、望君には本気なんだ？」

「おう！紳一郎とこいつは運命の出会いをして結ばれたんだ！
深く、熱く、愛しあってるんだよ！」

……な？」

「え？」

いきなり小沢先生にふられて、僕は何て答えたらいいのかわからない。

だから、僕は嘘をつけない性格なんだよ……。

第二十二話

「……そうなんです。僕と紳一郎さんは運命的な出会いをして（脅されて）結婚することになったんです」

嘘は言っていない。

「運命の出会い？……ふうん」

香月さんが探るような目で見たので、僕は視線をそらせた。

「香月、おまえの悪癖はよく知ってるが、

こいつにまでちよっかい出すのはやりすぎだぞ？

それに桃田は俺の大事な教え子で、変な虫がつかないようにしっかりと見張つというて

くれって紳一郎に頼まれてるんだ。

あいつはなあ、怒ったらものすごく怖いんだぞ？

校内でこいつになんかあったら、どんな目に合わされるか……。俺、絶対成敗される！」

小沢先生は自分の体を抱きしめるようにしてぶるぶると震えた。

小沢先生、時代劇じゃないんだから……。

「紳一郎のことが気に入らないからって、桃田を利用してあいつを挑発するのはやめてくれよな」

小沢先生が香月さんを睨みつけながらビシッと言うと、香月さんは肩を竦めた。

「なんでみんな誤解するんだろうなあ。僕はあいつのこと、嫌いじ

やないですよ？

昔から自慢できる従兄だと思ってます。

ただ、僕は紳一郎が持っているものが、何故かどうしても欲しくなるんですよえ。

物でもひとでも……。自分でも悪い癖だとは思っているんですけどね」

香月さんは呟きながら僕の方を見た。

なんだか、嫌な予感。

「望君に会いに来たのは、別に彼に何かしようって訳じゃなくて、本当に只の挨拶のつもりだったんですよ。『結婚なんてまだまだする気はない』なんて公言していた紳一郎が、

電撃結婚でしょう？それも相手が男子高校生だなんて、気になるじゃないですか。

どんな子がああ紳一郎を射止めたのか、知りたかっただけなんだけどなあ」

「はあ？じゃあ、なんだよ、さっきのは。

俺が止めなかったら、あのままこいつにチューしてただろ！？」

紳一郎に対する嫌がらせじゃねえか。おまえ男には興味なかっただろ？バリバリの女好きのくせに！」

「……確かにね。いくら紳一郎の相手でも、さすがに男に手をだそうとは思わなかったですね。

でも、望君の困った顔や泣きそうな顔を見ていたら、柄にもなく胸がときめいてしまってますね。

ああ、そうだ。先輩、知ってます？

彼、とてもいい香りがするんですよ。さっき肩を抱き寄せた時に気づいたんですけど」

「香り？桃田、おまえ何か変なフェロモンでも出してんのか？」

小沢先生はそう言って、僕の傍までくると鼻を近づけてくんくんと

犬みたいに匂いを嗅いだ。

「わっ！や、やめてくださいよ！」

なんで紳一郎さんの知り合いって、僕に変なことばかりするんだよ！

「ほんとだ。うまそうな匂いがする！」

おまえ、そんな甘い香りぶんぶんさせて校内をウロウロしたら、絶対誰かに喰われるぞ？」

危ないから気をつけろ、と小沢先生は厳しい顔つきで僕に言った。

「はあ？」

甘い香り？

芦川さんお勧めの桃シャンプーのせいかなあ。

僕も最初は気になってたんだけど、だんだん慣れて何も感じなくなってたよ。

……喰われるって、どういうことだよ？

「その甘い香りが僕を誘っているように思えて、ついフラフラと引き寄せられてしまってたね。」

脅えている顔にもそそられたし……つまり、魅力的な君が悪いんだよ？」

香月さんはにっこりと僕に向かって微笑んだ。

な、何わけわかんないこと言ってるんだよ、このひとは！
なんで、僕が悪いことになってんの？

第二十三話

「ところで、なんで紳一郎の結婚のこと知ってるんだ？」

桃田が学生の間は絶対に外に漏らすなつて緘口令が布いてあつた筈だぞ？」

「僕だつて朝吹家の一員なのに、教えてくれないなんて冷たいなあ。紳一郎の恋人のひとり……いや元恋人か。フランス人のモデルでマリーという女がいるんですけど」

聞き覚えのある名前が出てきて、ドキツとした。この間アンリさんが言つてたひとだ……。

「彼女、パリのオフィスに乗り込んで来ましてね。」

紳一郎に捨てられたからどうにかしてくれつて泣きつかれましたよ。いくら従兄弟だからつて、僕にそんなこと言われても困るんですけどねえ」

「おまえ達、知り合いだったのか？」

「ああ、以前ちよつと口説いたことがあるんですよ。振られましたけどね。」

彼女、紳一郎にかなり本気だったみたいですよ？

絶対に他の女達を出し抜いて、プロポーズさせてみせるつて宣言してましたからね」

「フランス人のトップモデルなんて、プライド高そうだなあ……」

……

「まあ、それはともかく、彼女に聞いたんですけど、

紳一郎、付き合いのあつた全員を一斉に整理したんでしょ？

それも短期間に慌ててバタバタと。

だからマリーみたいな面倒な女が出てくるんですよ、スマートな紳一郎らしくないなあ。

変だと思っただけで、うちの母親に電話してカマかけたら、男子高校生と結婚したことをあっさり白状してくれました」

「は、あいつもおまえだけには知られたくなかっただろうになあ。こんなに早くバレるとは……まあ、自業自得か。」

それで、こいつの顔を見にわざわざ帰国したのか？おまえも暇だなあ」

「実は本当の目的は違っただけですよ。」

仕事のこともあるんですが、母からおばあさまの具合が悪いと聞いて、お見舞いに行こうと思ひましてね。」

珍しく国内の別荘で静養されているそうだから」

「ああ、紳一郎の結婚パーティにも出られなかったんだよなあ。楽しみにしてただろうに……。」

前に会った時はムチャクチャ元気そうだったけど、年も年だしな……。」

おい、香月、ばあちゃんの孫で結婚していないのはもうおまえだけだろ？」

いつまでもフラフラしてないで、早く落ち着いてばあちゃんを安心させてやれ！」

でないと手遅れになって後悔することになるぞ？」

小沢先生は教師モードになって、香月さんにお説教を始めた。

「……縁起でもないことを言わないでくださいよ。」

それに、余計なお世話です。相変わらずおせっかいな方ですね」

「なにい？」

「あの、」

僕は険悪な空気になってきたふたりに、おそろおそろ声をかけた。

「僕、もう失礼していいですか？5時限目が始まっちゃう……。」

「あ、いけね！とつくに授業始まってるんだよ。」

おまえを迎えに来たんだった」

「え？」

僕は慌てて応接室の時計を見た。
本当だ。

この部屋チャイム聞こえないの？

「教室におまえがいないから気になってな。

真面目なおまえがサボるわけないし、山口先生に朝吹家から面会人が来てるって聞いてピンときたんだ。

屋敷じゃなくて、わざわざ学校までおまえに会いに来る関係者なんて怪しいからな」

「朝吹邸に行っても簡単には会わせてくれないんじゃないかと思いましてね。

それに、あそこでは誰にも邪魔されずに彼とふたりで話すのも難しそうだし」

香月さんはソファから立ち上がると僕に近寄ってきた。

微かにコロンの香りがする。

さっきのこともあつて緊張してしまうよ。

今は小沢先生がいるから大丈夫だろうけど。

「さっきの話だけど、本当に悪かったよ。

除け者にされたので、悔しくてね。

つい、君に意地悪をしてしまった。

あんなこと言っただけど、紳一郎は君を悲しませるようなことはしないんじゃないかな？

大事にされてるみたいだしね」

香月さんはそう言っただけで僕の隣で睨みをきかせている小沢先生に視線を向けた。

「さて、そろそろ失礼します。

望君。今日は途中で邪魔が入ってゆっくり話せなかったけど、パリに帰る前に、改めて朝吹邸に挨拶に寄らせてもらうことにするよ。

紳一郎にもよろしく伝えといてくれないかな？

『結婚おめでとう。可愛い花嫁でとても羨ましい』ってね」

第二十四話

「ニューヨーク？」

「はい。今朝、望様が出られてすぐに紳一郎様からお電話がありました。」

急な出張で向こうに行かれることになったそうです」

「そう……」

今日のこと、紳一郎さんにどんなふうに報告したらいいのか、ずっと悩んでただけだ……。

気が抜けちゃったよ。

「望様には、あちらに着いてからお電話されるそうですわ」

「紳一郎さん、お仕事大変なんですね。体壊さないといいけど。」

…… 芦川さん、どうしたの？ 怖い顔して」

いつもは僕が帰ると笑顔で迎えてくれる芦川さんなのに、今日はなんだか不機嫌そうだ。

「あんまりですわ！ 新婚だというのに一日もお休みをとられないばかりか、お帰りも毎日真夜中！」

そのうえ、いきなり海外出張ですって？ あの秘書、きつと紳一郎様を過労死させるつもりなんです！」

芦川さんは、僕から受け取った通学鞆をギュッと抱きしめて叫んだ。

毎朝紳一郎さんを迎えにくる秘書のひとは、

紳一郎さんと同じくらいの年齢で、背が高くて、眼鏡をかけてて、

ハンサムだけど冷たそうなひとだ。

僕には丁寧に接してくれるけど、何を考えているのかわからなくて、ちょっと近寄りがたい感じ？

「……それに紳一郎様も紳一郎様です！結婚なさる前から忙しい方でしたけど、
それでも余裕で複数の方とおつきあいなさってました！
望様おひとりのお相手もできないなんて、どういいうおつもりなんでしょうか！？」
「……………」

「……あ、私ったら何てことを……申し訳ありません！」
芦川さんは僕の顔を見て、慌てて頭を下げた。
「うっん、芦川さん、僕の為に怒ってくれてるんですね？
僕は平気だから。紳一郎さんのお仕事が忙しいんだから仕方ないです」

「……………望様」
芦川さんはしょんぼりとしてしまって、こっちが気の毒になってしまふ。

「芦川さん、僕、このまま勉強部屋の方に行っていいですか？
先に宿題を済ませようと思って。あ、案内はいいですから」
「わかりました。後でお茶をお持ちしますわね。
でも、本当におひとりで大丈夫ですか？」
芦川さんは、鞆を僕に渡しながら心配顔で尋ねた。
一週間前、屋敷内で迷子になったことを思い出したんだろう。
「大丈夫です……たぶん」

僕は部屋に入るとカーテンと窓を開けて、勉強机の前に座った。
今日はなんだかいりいあって疲れちゃったよ……。

勉強部屋はこの屋敷で一番心休まる場所なんだ。

紳一郎さんは僕の為に豪華な部屋を用意してくれたけど、値段を聞くのも怖いような家具や骨董品が置いてあって、自分の部屋だというのにすごく緊張してしまう。

それに比べたらここは実家の僕の部屋と同じくらいの広さで、余計な装飾品とかもなくてホッとするんだ。

机の上に地球儀を置いて、クルクル回しながらニューヨークを探した。

「ニューヨークまで、どれくらいかかるんだろう？ 紳一郎さん、まだ飛行機の中だね。

いつ帰ってくるのかな……」

第二十五話

翌朝。

朝食を取っていると、芦川さんが小さなトレイに電話の子機を乗せて持ってきた。

「望様、紳一郎様からお電話です」

「え！？あ、ありがとうございます」

僕はドギマギしながらそれを受け取った。

今までだって紳一郎さんと電話で話したことはあるのに、なんでもこんなに緊張するんだ？

「も、もも、もしもし？」

『望か？』

こんな時間に電話してすまない。もう出かけるんだろ？

こっちに着いてすぐにかけるつもりだったんだが、寝ていると悪いと思ってね』

「…………いえ。まだ大丈夫です」

昨日は、紳一郎さんからの電話を待つて遅くまで起きていた事は内緒だ。

『何か変わったことはないか？』

昨日の香月さんのことが頭をよぎったけど、電話で話すことじゃないよね？

「…………何もありません。」

あ、あの、お仕事頑張ってください！あ、でも無理はしないでください！」

…………そんなこと言われなくてもわかってるだろうけど、気のきいた言葉が見つからないよ。

受話器から小さな笑い声が聞こえた。

『飛行機が揺れて眠れなかったうえに、着いた早々ミーティングで実は少々へばってんだ。』

でも、君の声を聴いて元気が出たよ。……いや、それより、生まれて初めてホームシックにかかりそうだな』

「……………」

冗談だとわかっていても、そんなこと言われたらドキドキしてしまう。

『望？さつき芦川君に聞いたんだが、最近あまり食べないそうだな。体調が悪いのか？』

「え？そんなことありません！元気です！」

『それならいいが……。ああ、ついでに彼女に叱られたよ、まいったな』

「え？」

あの紳一郎さんを叱った？

芦川さんってすごいなあ、只のメイドさんじゃないよ。でも何を？

『ああ、そろそろ切らないとな。』

明日の便で帰るよ。そっちに着くのは……明後日の昼過ぎになるだろうな』

「はい。わかりました」

よかった。明後日は日曜日だ。

『そうだ、芦川君に伝言を頼みたいんだが、いいか？』
「はい」

『望のことは、出張から帰ったら充分に可愛がるつもりだから安心してくれ、だ。』

『それじゃ』

『はい！』

……え？え？も、もしもし？紳一郎さん！？』

切れてる……。

今なんて言った？

「望様？どうかありませんでした？」

芦川さんが不思議そうに、受話器を持ったまま固まっている僕の顔を覗き込んだ。

今の伝言を彼女に伝えるべきか、僕は真剣に悩んでいた。

第二十六話

日曜日。

僕は落ち着かない気持ちで、紳一郎さんの帰りを待っていた。
一昨日の芦川さんへの伝言を思い出して、ドキドキする。
(結局、芦川さんには恥ずかしくてどうしても言えなかった)

僕を、か、可愛がるって……。

いろいろと変な想像をしてしまう僕っていやらしいのかな？

結婚してから一ヶ月近く経つけど、僕と紳一郎さんはまだキスまで
しかしていない。

同じベッドで、ただ寝ているだけだ。

紳一郎さんの仕事が忙しくて夜遅いので、そんな時間がなかったんだよね……。

結婚したばかりの時は花嫁の務めだと思っていたから、

一度は覚悟を決めた僕だけ……。

こんなに時間が開くと、怖气ついちゃうよ。

余計な事を考えてしまうんだ。

僕、うまく出来るのかな？

キスされただけでガチガチになっちゃうのに……。

経験豊富な紳一郎さんが、初心者僕なんか満足するんだろうか？
失望させて、嫌われたりして……。

ああ、もっと、勉強しとくんだった！！

「望様？ご気分でも悪いんですか？」

すみません。

ノックしたんですけど、お返事がないので……」

芦川さんの声がして、机に伏せていた僕は慌てて椅子から立ち上がった。

自分の部屋にいても落ち着かないので、勉強部屋で待機していたんだ。

「あ、芦川さん、紳一郎さん、もう帰ってきたんですか？
すぐに玄関に行かなくっちゃ！」

「いえ、まだですけど」

「あ、そう……」

「それが、お客様がおみえなんです。

前にいらしたことのあるアンリ様と、あと、紳一郎様の従弟の方が

……」

「……従弟って、香月さん？」

そういえば、フランスに帰る前に挨拶に寄るって言ってたな。
本当に来ちゃったんだ。

「ご存知なんですか？」

あの、紳一郎様のお留守にお通してもよろしいんでしょうか？

アンリ様は今日お約束をなさってたらしいんですけど、この間のことがありますし……。

望様に伺ってからと思いついて、お待たせしてるんです」

「……追いつくわけにはいかないよ。

紳一郎さんも、もうすぐ帰ってくるだろうし、お通ししてください。
僕もすぐに行きますから」

「はい、わかりました！」

望様、この芦川がしっかりお守り致しますので、ご安心なさってください。

ださい！

今日は望様には指一本触れさせませんわ」

芦川さんは厳しい顔で、指をポキポキと鳴らした。

「あ、ありがとう。お願いします」

アンリさんはこの間の一件で、芦川さんのブラックリストに入ってしまったらしい。

僕ひとりでアンリさんと香月さんのお相手をするのはちょっと荷が重いけど

これも紳一郎さんの花嫁である僕の務めなんだよね。

それに、ここでひとりで紳一郎さんの帰りを待つよりもいいかもしれない。

余計なことばかり考えちゃうし……。

僕は勉強部屋を出て、お客さんの待つ応接室に向かった

第二十七話

「ノゾミ……なんか凄いね」

目の前のアンリさんが目を丸くしている。

「壮観だな……」

その隣の香月さんが、優雅な仕種でカップを持ち上げながら呟いた。

僕の座っているソファの後ろには、芦川さんを始め、何人ものメイドさんがズラリと控えている。

「姫君をお守りする騎士団ってところかな？」

アンリ、どうせ君が何かやらかしたんだろ？」

「ノゾミにフランス式の挨拶をしようとしただけだよ。」

ノゾミ、どうにかならない？」

あんなに怖い顔で睨まれてちゃ、話もできないよ」

「芦川さん。ちょっと大げさじゃないですか？」

僕はすぐ後ろに控えている芦川さんにヒソヒソ声で言った。

「そうですか？ 望様を完璧にお守りする為には、このくらいの人数は必要かと思ひまして。」

今日は相手がふたりですし……。

私の勘では、あの従弟の方も危険人物のような気がしますわ」

芦川さん、鋭いよ。

「……大丈夫ですよ。」

こんなんじゃない、僕も落ち着かないし……」

それに、女のひと達に守られるなんて、ちょっと情けないような気もする。

僕は芦川さん以外の他のメイドさん達には引き取ってもらった。自分を睨み続けていたメイドさん達がなくなったせいか、アンリさんはホッとした顔をした。

「ここに着いたらパリにいる筈のリユウが来てるんで、目を疑ったよ。」

リユウ、彼に何かしたら、この僕が許さないよ?」

アンリさんが睨むと、香月さんは声をたてて笑った。

「怖いなあ。望君にはボディガードが何人もいるんだな。」

小沢先輩に、アンリに、メイド軍団か……。

近寄るだけでも大変そうだな。

かなり手強いなあ。まあ、その方が燃えるけどね?」

「まったく……。早くその病氣治したほうがいいよ?」

アンリさんはもう一度香月さんを睨むと、僕の方に向き直った。

「ノゾミ、指輪を持ってきたんだ。」

シンイチロウに電話したら、今日が都合がいいと聞いてね」

結婚指輪、出来たんだ。

紳一郎さんが選んだお揃いの指輪を持つなんて、ちょっとドキドキする。

「……嬉しそうだね」

「え?」

顔を上げると、香月さんが僕のことをじつと見つめていた。

「本当に紳一郎のこと好きなんだ」

「バカだなあ、リユウ。当たり前だろ?」

ふたりは新婚ホヤホヤのアツアツ夫婦なんだから。

この前なんて、あてられちゃってまいったよ。

君が割り込む隙なんて絶対ないからね？」

アンリさんがニヤニヤしながら香月さんに言った。

そうだった。

この前、紳一郎さんにキスされるところをアンリさんに見られたんだった！

僕はあの時のことを思い出して、カーッと熱くなった。

「ノゾミ、顔が真っ赤だよ？どうしたの？」

「な、何でもありません……」

ふたりの視線を感じて、モジモジしていると

ノックの音がして、メイドさんが慌てた様子で入ってきた。

「望様、紳一郎様がお帰りになりました！」

今、お車が入ったところですね。

お急ぎください！」

「は、はい！」

玄関でちゃんと出迎えたいから、紳一郎さんの車が門に着いたらすぐに教えて欲しいって頼んでおいたんだ。

「アンリさん、香月さん、ちょっと失礼します！」

僕はふたりに挨拶をして、胸を高鳴らせながら玄関に走った。

第二十八話

玄関の扉を開けてもらって外に出ると、丁度車寄せにピカピカの黒い高級車が滑り込んできたところだった。

よかった、間に合った。

ここはお屋敷の門から玄関までの距離があるから、こういう時助かるよ。

助手席から秘書のひとが降りてきて、後ろのドアを開けた。

「あれ？」

紳一郎さんが出てくるのかと思ったら、若い女の人だった。

誰だろ？

涼しげなブルーのワンピースを着たほっそりしたひとだ。

反対側のドアから紳一郎さんが降りてきた。

そのまま女のひとのところに行って、手に持っていたカーディガンを彼女の肩にかけた。

「芦川さん、あのお客さん、どなたですか？知ってるひと？」

僕は隣に立っている芦川さんに尋ねてみた。

「お見かけしたことがあるようなないような……」。

えーと、どなただったかしら？ああっ！ここまで出てるのに！」

「……綺麗なひとだね」

紳一郎さんと並ぶと、すぐくお似合いに見える。

じつと見ていると、女のひとが僕に気づいて、紳一郎さんに何か言った。

紳一郎さんが振り返ってこっちを見たので、ついペコリとお辞儀をした。

ふたりが僕の方に近づいてくる。

紳一郎さんは僕の前まで来ると、柔らかに微笑んだ。

「わざわざ迎えに出てくれたのか？嬉しいな。

ただいま、望」

「お、お帰りなさ」

「きゃっ！」

紳一郎さんの隣に立とうとした女のひとの体が前に倒れそうになった。

「おい！大丈夫か？気分が悪くなったのか？」

慌てて彼女を支えた紳一郎さんが、焦った声で言った。

「ごめんなさい。ちよつと躓いちゃって……」

「まったく、ヒヤヒヤさせるなあ。君ひとりの体じゃないんだぞ」

「はい。気をつけます」

「君もわかっていると思うが、その子は朝吹の家を継ぐことになるんだ。体を大事にして、丈夫で元気な子を産んでくれよ」

え？

女のひとは困ったような顔で、お腹に手を当てている。

僕はその意味がわかって、頭の中が真っ白になった。

「望君」

誰かが僕の肩に手を置いた。

「あ……」

それは険しい表情をした香月さんで、

その横にはアンリさんもいて、心配そうな顔で僕を見ていた。

「少しやすんだほうがいい。すぐに君の部屋を用意させるよ」

紳一郎さんは女のひとから手を離すと、僕の方に向き直った。

「望、紹介するよ。彼女は。」

……おい、なんでおまえがここにいるんだ？」
それに、なんだその手は」

香月さんに気づいた紳一郎さんが、冷たい声で言った。

「紳一郎、おまえってやつは……。
結婚したばかりで、いくらなんでも早すぎるだろう！
望君を馬鹿にしているのか！」

「何のことだ？いいからその手をどけろ！
望、こっちに来なさい！」

紳一郎さんの声は、今までに聞いた事もないような強い口調だった。

僕の足は動かなかった。

さっきまで、女のひとにはあんなに優しい笑顔を向けていたのに……。
…。

なんで、そんなに怖い顔をするの？

僕……

香月さんから跡継ぎのことは聞いてたから、
いつかこんな日があるんだろうな、とは思ってたけど……。

その時は覚悟しなくちゃって思ったけど。

まだ、心の準備ができてないよ。

香月さんじゃないけど、いくらなんでも早すぎるよ。

愛人はつくらないって言ったのはついこの間なのに、愛人どころか
赤ちゃんまでもうつくってるじゃないか！

「望！」

苛立った声で名前を呼ばれて、僕は俯いていた顔を上げた。

「の、望？」

紳一郎さんの焦ったような声が聞こえた。

返事をしなくちゃいけないのに、喉が詰って声が出ない。

それに、なぜか目が潤んできて紳一郎さんの顔がぼやけて見える。

「シンイチロウ、見損なったよ」

「紳一郎様、あ、あんまりです！望様がお気の毒ですわ！」

「こんな純粋な子に、なんて酷い仕打ちをするんだ。

こんなヤツが従兄だなんて、恥ずかしいよ！」

香月さん達が口々に紳一郎さんのことを責め立てている。

「おまえたち、何を言ってるんだ？

どうして、望は泣いてるんだ！！

誰か説明してくれよ……」

困ったような紳一郎さんの声が聴こえるけど、どんな顔をしているのかわからない。

どうしよう、涙が止まらないよ。

第二十九話

「どうしたの？可愛い顔が台無しよ？」

優しい声と一緒に、頬に柔らかい物が押し当てられる。

女のひとが、ハンカチで僕の涙を拭ってくれていた。

「かまわないでください……」

小さな声で断って、それを避けるように後ずさった。

このひとに氣遣われるなんて嫌だ。

目をゴシゴシと擦っていると、誰かがプツと吹き出すのが聴こえた。

秘書のひとが口に拳を当てて肩を震わせている。

「……加納、何がおかしいんだ」

紳一郎さんの尖った声に秘書のひとは咳払いをした。

「失礼。我慢していたんですけど。」

皆さんが、なんと言うか……」

秘書さんは僕達ひとりひとりの顔を順番に見て、またプーツと吹き出した。

このひとが笑うところなんて初めて見たような気がする。

いつもクールで無表情なんだよね。

でも、なんでこんな空気の中で笑えるんだよ！

「望」

紳一郎さんが僕の名前を呼んだ。

秘書さんのおかげ（？）で涙は止まっていたので

紳一郎さんの困惑しているような顔が目に入った。

つらいけど、今、言わなくっちゃ。

「……紳一郎さん、お話があります」

「え？」

「僕、実家に帰らせてもらいます。り、離婚してください！」

紳一郎さんは、僕の言葉に眉を顰めた。

そして、冷たい瞳で僕を見据えた。

この瞳には見覚えがある。

初めて会った日に、僕を脅したときとおんなじだ。

お父さん、僕のせいで会社がつぶれたらごめんなさい！！

でも、僕、紳一郎さんのことを好きになっちゃったんだ。

好きだから、他に女のひとがいる紳一郎さんと結婚しているのは凄くつらいんだ。

……僕って独占欲の強いヤツだったんだね。

自分でも気づかなかったよ。

「だめだ」

紳一郎さんは低い声で言った。

「契約は一年の筈だ。まだ一ヶ月しか経っていない。

君は平気で約束を破るような人間だったのか？

失望させないでくれよ」

今の言葉にカチンとくる。

……紳一郎さんがそれを言う？

僕は紳一郎さんをキッと睨みつけた。

「それはこっちのセリフだよ！」

僕だけだつて言つたくせに！嘘つき！」

「まあ、もう夫婦喧嘩？」

こんなにギャラリーがいるところではやめといた方がいいわねえ。
ところで、契約つてなんのこと？」

いきなり割り込んできた声に、僕達はギクリとした。

そして、ふたりでおそろおそろ声のした方を見た。

そこには、

着物姿の小さなおばあさんがニコニコして立っていた。

第三十話

「おばあさま！」

香月さんが慌てた様子でおばあさんに駆け寄って行った。

「一体今までどこにいらしたんですか！？」

別荘で静養されてると聞いてたのに、どこにもいらっしやらないし、捜したんですよ！？」

「知り合いの温泉旅館でのんびりしていたのよ。」

別荘なんかいたら見舞客の相手が面倒ですからね」

おばあさんはおっとりと言った。

このひとが、朝吹のおばあさん？

想像していたひとと違うなあ。

小さくてかわいいおばあちゃんだ。

朝吹家で一番偉いみたいだから、もっと怖そうな感じのひとだと思
ってた。

「紳一郎？」

「……はい」

紳一郎さんが気まずい顔で返事をする。

「話は中で聞かせてもらいますよ？」

「……………」

ニコニコしてるけど、有無を言わさない感じ。

やっぱり、怖いひとなのかな？

「呆れてものが言えないよ」

香月さんが低い声で言った。

紳一郎さんはふてくされたようにして、行儀悪くソファーにもたれかかっている。

僕達は応接室に場所を移した。

僕の隣には紳一郎さん、その隣には女のひとが座っている。

……嫌な構図だなあ。

紳一郎さんを挟んで本妻（僕）と愛人が並んでるなんて。

正面のソファーにはおばあさんが座っていて、両隣には香月さんとアンリさんがいる。

おばあさんの後ろには、サングラスを掛けた若い男のひとが控えていた。

車寄せにおばあさんが乗ってきたらしい車が止まっていたから、このひとが運転してきたんだろうな。

ドアの近くには秘書のひとが立っていて、いつもの無表情に戻っている。

芦川さんやメイドさん達はお茶の用意が済むと部屋から出て行ってしまった。

なんだか心細いな……。

皆がソファーに落ち着くと、紳一郎さんは結婚までの経緯を何もかもバカ正直に話してしまった。

まるでヤケになっているみたいだ。

あれから一度も僕の顔を見ようとしないし……。

「父親の会社の件で脅して無理矢理自分の花嫁にしたってことか。つまり、望君の人生を、朝吹の権力で買ったんだな？」

……援助交際より性質が悪いじゃないか」

香月さんの言葉に、紳一郎さんの眉がピクリと動いた。

「リ、リュウ、その単語はNGだよ？」

アンリさんが慌てて窘めると、香月さんはハツとした顔で僕を見た。
「いや、今のは望君を侮辱したわけじゃないんだ。

すまない、失言だった」

「いいえ……」

そうだよな。

僕がやってることは、援助交際と変わらないんだ。

お父さんの会社と僕の体を引き替えにしたんだから……。

「望は被害者だ。全部俺が悪いんだよ。何とでも言ってくれ。
望とは離婚して実家に返す。……どうやら嫌われているみたいだからな。

もちろん、彼の父親には何もしない。

これでいいだろう？」

「え？」

僕は思わず紳一郎さんの方を見た。

さつきは離婚は許さないって言ってたのに……。

紳一郎さんはかたくなに僕の方を見ようとしなかった。

香月さんはそんな僕達を見て溜息をついた。

「嫌われるのは当たり前だろ？」

卑怯な手段で望君を自分のものにしたうえに

平気な顔で身重の愛人をここに連れてくる無神経なヤツなんてさ」

「何？」

「あのう、皆さん何か誤解なさってるようなんですけど……」
女のひとがオズオズと声をはさんできた。

「お腹の子の父親は、あの……」

彼女はおばあさんの方をチラチラと伺いながら、言いにくそうにしている。

そんな彼女に代わって紳一郎さんが言った。

「親父の子だよ。彼女は親父の恋人だ」

「……ええっ!?!」

僕と香月さんとアンリさんの叫び声が重なった。

「……まさかおまえ達、彼女が俺の愛人だと思ったんじゃないだろうな!?!」

紳一郎さんは怒りを抑えたような声で言ってから、初めて僕に視線を向けた。

こつちを見てくれたのはいいけど、凄く怖い顔をしている。

目を合わせられなくて、僕は俯いてしまった。

そういえば、紳一郎さんのお父さんってマンションで女のひとと一緒に暮らしてるって言ってたっけ。

こんなに若いひとだとは思わなかった。

なんだ……。

僕の勘違いだったんだ。

よかった。

……でも、

紳一郎さん、さっき僕と離婚するって言ったよね?

僕も離婚してくださいって言っちゃったし……。

これって離婚成立?

第三十一話

「俺と入れ替わりに、今度は親父が向こうに行くことになってね。留守の間彼女をひとりにするのは心配だから、ここで預かってくれと頼まれたんだ」

紳一郎さんが尖った声で説明した。

「俺は『平気で身重の愛人を花嫁に紹介する無神経な男』だと思われたのか。」

……君は俺のことを信じていなかったんだな」

「ごめんなさい」

小さな声で謝ったけれど、紳一郎さんは何も言ってくれなかった。

……怒ってるんだ。

「ふん。誤解される方にも問題があるんだ。」

何しろおまえは、複数の恋人と同時につきあえる器用な男だからな。それに、今更そんなことどうでもいいじゃないか。

どうせ離婚するんだろ？」

「龍二、おやめなさい」

今まで黙って話を聞いていたおばあさんが、香月さんを窘めた。

「あなただつて、けして褒められた性格じゃありませんよ？」

子供の頃から紳一郎が持っている物ばかり欲しがって、手に入れた途端すぐに飽きてポイ。

今でもそのクセは治っていないそうね？」

香月さんは子供みたいに唇をへの字にした。

「……おばあさま、僕のことはいいでしょ。」

大体、望君がこんな目にあつたのは、もとはと言えばおばあさまが悪いですよ？

妙な方法で紳一郎の花嫁を選んだりするからじゃないですか」

「だって、どうしても望ちゃんを紳一郎のお嫁さんに欲しかったのよ」

え？

思わず顔を上げると、穏やかな笑みを浮かべているおばあさんと目が合った。

僕はその笑顔に何か引つかかるものを感じた。

それに、今のはどういう意味？

「そうそう、望ちゃんにお土産があるのよ。すっかり忘れていたわ。速水、あれを」

「はい」

後ろに控えていた男のひとが返事をして、紙袋をおばあさんに渡した。

いつのまにかサングラスをはずして、ハンサムな顔が現れている。

……気のせいかなあ？

このひと、前に会ったことがあるような気がするんだけど。

「はい、まだあたたかいわよ」

おばあさんが紙袋から取り出した包みを僕に渡してくれた。

こんな雰囲気の中でいいんだろうか？

……なんだか暢気なひとだなあ。

「あ、ありがとうございます……あれ？」

この包装紙にはすごく見覚えがある。

桃のイラストと店名がプリントされているこれは、

僕がいつも桃まんじゅうを買いに行ってる『モモタロ』の包装紙だ。

「お店は来週から開けるつもりなんだけど、望ちゃんの為に特別に作ったのよ」

「え？」

僕は今の言葉の意味を考えながら、包みとおばあさんの顔を何度も見比べた。

そして、

10秒ほどおばあさんの顔を見詰めた後、おそろおそろ尋ねてみる。

「……もしかして、おばあちゃん？」

「気がつくのに随分時間がかかったわねえ、望ちゃん」

『モモタロ』のおばあちゃんが、呆れた顔で僕に言った。

第三十二話

「だつて……」

『モモタロ』のおばあちゃんは、お店ではいつもまあるいメガネを掛けてて、

三角巾と割烹着姿で、そんな高そうな着物なんか着てないし……。それに、

「……いつもはそんな喋り方じゃないよね？」

お店ではもつとチャキチャキしてて、今みたいにおっとりした話し方はしない。

「あの格好をすると自然にああなっちゃうのよ。
商売人モードになるのかしらねえ」

おばあちゃんは口には手をあてて上品に笑った。

「……………」

お店ではいつも大口開けて笑ってるよね？

朝吹のおばあさんと『モモタロ』のおばあちゃんが同一人物？
どういうこと？

頭の中がグルグルしてきた。

「……おばあちゃん、どこか悪かったの？」

お店、ずっと閉まつてるから心配してたんだよ？

病気で入院でもしてるんじゃないかって……」

聞きたいことはたくさんあったけど、

とりあえずずっと気になっていたことを聞いてみた。

「え？ええ、ちよつとね」

おばあちゃんは僕の質問に目を泳がせた。

「店で業務用の砂糖袋をひとりで持ち上げようとして、ギックリ腰

になられたんですよ」

後ろの男のひとがおばあちゃんの代わりに答えた。

「は、速水！」

「紳一郎様と望様の結婚が決まってそれはもう大喜びで、はりきりすぎたんですね。」

お年も考えずに無理なさって……。おかげでおふたりの結婚パーティーも出席できなくなっただですよ？情けない姿で皆の前に出るのは嫌だと仰って」

「速水！バラすんじゃないやありません！」

「……申し訳ありません」

男のひとは笑いをこらえながらお辞儀をした。

……思い出した。

このひと、あのパーティーで桃まんじゅうを勧めてくれたボーイさんだ。

あの時のことを思い出しながらじっと見てみると、それに気づいたのか彼がニコツと微笑んだ。

「何をふたりで見つめあってるんだ？」

隣から不機嫌そうな声が聞こえた。

「べ、別に……」

チラリと紳一郎さんを見たら、相変わらず仏頂面をしている。

「おばあさま、さつきから何の話をされてるんです。」

僕達にもわかるように説明してください。

以前から望君のことはご存知だったってことなんですか？」

おばあちゃんはもったいつけるようにゆっくりと紅茶を飲んだ。

「実は私、去年の秋からお店を始めたのよ。」

桃まんじゅうのお店で『モモタロ』って言うの」

「モモタロ？」

「そう、私の名前の『百代』とおじいさんの『一太郎』からとったのよ？」

「いい名前でしょ？」

「……………」

「去年からなかなか所在が掴めないはずですよ。」

「てつきりいつものように海外で別荘巡りでもされてるのかと思っていたのに」

「香月さんが呆れたように言った。」

「紳一郎、おまえ知らなかったのか？」

「………… ああ。今、初めて聞いた」

「旅行も飽きたし、かといって家に居てもすることはないし、息子も孫も忙しくて、ほとんど顔も見せてくれないしねえ…………」

「おばあちゃんが淋しそうに言うと、紳一郎さんと香月さんは気まずそうな表情になった。」

「このままお迎えを待つだけの味気ない生活は嫌だなと思ったのよ。」

「私のような年でも立派に働いてるひとはたくさんいるんだし、大好きな桃まんじゅうのお店を始めることにしたの。」

「生活がかかってるわけじゃないから、道楽だと言われても仕方ないけどね？」

「おばあちゃんは悪戯っぽい声で言った。」

「………… 確かに他の店に比べたら営業時間は短いし、定休日も多いお店だ。」

「望ちゃんが初めてお店に来てくれた日のことはよく覚えてますよ。」

恥ずかしそうにモジモジしながら入ってきたわね？可愛かったわ」
「……………」

おいしい桃まんじゅうのお店が出来たって噂を聞いて、初めて『モタロ』に行った時は、

お店の中に近くの高校の女子生徒がたくさんいて圧倒されたんだ。僕、ずっと男子校だから免疫がなかったんだよ……。

あの時は勇気を振り絞ってお店に入ったんだ。

「私のおまんじゅうを気に入ってくれて、お店に何度も来てくれるようになったでしょう？」

話をしてみたら、素直で、さっきみたいに私の体を気遣ってくれるいい子だし……。

店にはいろんな女の子が来るけど、望ちゃんほど可愛い子はいませんでしたよ。

どうしても朝吹の家に迎えたくなくなってしまったの。

都合のいいことに孫の紳一郎はまだ独身で、決まったひとはいないようだったし、

この際ふたりを一緒にさせようと思ったのよ」

……おばあちゃん、僕の性別のことは考えなかったの？

第三十三話

「おばあちゃん、僕のこと女の子だと思ってるんじゃないよね？」
念のために確認を試みる。

「まあ、望ちゃんったら」

おばあちゃんはくすくすと笑った。

「まだそんなにボケちゃいませんよ。」

でも、スカートをはいてたらわからなかったかもね」

「……………おばあちゃん」

「冗談よ。」

問題ないと思ったのよ。紳一郎は女性とも男性ともおつきあいの出来る……………

えーと、何て言ったかしら？……………バイ？なんでしょ？」

おばあちゃんの無邪気な声に紳一郎さんは渋い顔をした。

「よくそんな言葉をご存知ですね」

「お店には若い子もたくさん来るから、いろいろ勉強しているんですよ」

「……………そんな単語、いつ使うんですか」

「おばあさま、朝吹の後継者のことはどうするおつもりだったんですか？」

望君を傷つけないですむいい方法をもちろん考えてたんですよ？

まさか、忘れてたとか言わないで下さいよ！？」

香月さんに強い口調で問われて、おばあちゃんは目を丸くした。

「洋一郎に頑張ってもらうつもりでしたよ。」

あの年でこんなに若いお嬢さんとおつきあいできるほど元気なんですもの。

これから何人も紳一郎の兄弟を増やしてくれるはずですよ？」

「え……」

女のひとがビツクリした顔でおばあちゃんを見ている。

「……あの、私達のこと許してくださいさるんですか？」

「許すもなにも別に反対なんかしてませんよ？ 洋一郎がそう言ったの？」

「いえ、洋ちゃ……洋一郎さんは何も……」。

お母様に紹介してくださらないので、てっきり私達のことをお気に召さないのかと思ってました」

「ああ、ごめんなさいねえ。」

洋一郎からあなたと一緒にになりたいと聞いたのは、丁度『モモタロ』の開店準備で超忙しい時で、バタバタしていたのよ。

『勝手にしていいわよ』と言ったら、あの子さつさとこの家を出ていつちゃったのよねえ。まったく、せつかちなんだから」

「……そんな言い方では親父も誤解しますよ」

紳一郎さんが窘めると、おばあちゃんは苦笑いをした。

「店のことがあの子にばれたら絶対に邪魔されると思って、しばらく顔を会わせなくなかったのよ。」

落ち着いてから紹介してもらおうとは思ってたんだけど、お互い忙しくてなかなか時間がつくれなくてねえ。

晶子さんだったわね。確か紳一郎の大学のお友達だそうね」

「……はい」

「去年の春にもここでパーティをやったこと覚えてらっしゃいますか？」

彼女も来てくれたんですよ。その時親父が一目惚れしたんです。

………という訳か彼女もね。

それを聞かされた時は、俺も驚きましたけどね」

紳一郎さんがふたりの出会いを説明した。

紳一郎さんのお父さんとは結婚パーティでしか会った事はない。

朝吹グループの社長さんだけあって、貫禄はあるけど、優しい感じのひとだったな。

「まあ！やっぱパーティってロマンス発生率が高いのねえ。

晶子さん、あなたもお腹の赤ちゃんも歓迎しますよ。

体を大事にして、いい子を産んでちょうだいね？」

「はい！ありがとうございます」

おばあちゃんの優しい言葉に、女のひと……晶子さんは、嬉しそうに微笑んだ。

「えーと、どこまで話したかしらねえ。

そうそう、

それで、紳一郎と望ちゃんをうまくつつける方法をいろいろ考えたんですよ。

せっかくだから、できるだけロマンスチックなほうがいいと思ってね。

運命の指輪に導かれて出会ったふたりが結ばれるなんて素敵でしょ？

実は、以前読んだロマンス小説を参考にしたのよ！」

おばあちゃんは目をキラキラさせて言った。

「運命の指輪ねえ、都合よく望君がそれを見つける訳ないですよ？

もちろん、おばあさまが小細工なさったんでしょ？」

香月さんが尋ねると、おばあちゃんは肩を竦めた。

「パーティの日、ここにいる速水にボーイに変装してもらって望ちゃんに指輪入り桃まんじゅうを

勧めてもらったのよ。桃まんじゅうには目の無い望ちゃんだから、絶対うまくいくと思ったんですよ」

う……。

簡単に引っかけた僕って……。

「運命の指輪、花嫁選びのパーティ、ハンサムな御曹司、可愛い男子高校生、これだけロマンチックな条件が揃ったらロマンスが生まれないのは嘘だと思ったんだけどねえ。何がいけなかったのかしら？」

おばあちゃんは首を傾げている。

その、『男子高校生』ってところじゃないかと思うんだけど……。もし僕が女の子だったら、一瞬で紳一郎さんに恋をしたんだろうな。格好よくてお金持ちで、女の子の理想の塊みたいな紳一郎さんに会ったその日にプロポーズされるなんて、まるで御伽話みたいだもんね。

「あなたならうまくやれると思ったのに、情けないわねえ。紳一郎？ 口説くのではなくて、脅迫するなんて……。世間ではプレイボーイと言われるらしいけど、もっとましな方は考え付かなかったの？」

おばあちゃんに睨まれた紳一郎さんは、気まずそうな顔をした。

「……あの時はそれしか思いつかなかったんですよ。プロポーズをあっさり断られて、頭に血が昇ったんです。自分でもどうかしてると思いましたよ」

第三十四話

「普通の男子高校生が男からのプロポーズを喜んで受けるわけがないだろう」

香月さんが呆れたように言った。

「花嫁候補の中に男の子が混じってるなんて、何かの手違いだろうと思ったださ。」

最初は彼の反応が面白くて、冗談半分だったんだ。

なのに、気がついたら彼を脅す言葉を口にしていた。

自分でもバカなことをしたと思ってるよ」

紳一郎さんは額に手を当てひとつ溜息をつく、僕の方を見た。

「望君。」

申し訳ないことをした。

謝って済む事じゃないかもしれないが、後悔しているよ。

あんな卑怯な手段で、君を手に入れようとするなんて、最低の男だな、俺は」

紳一郎さん、顔色が悪い。

海外出張で疲れて帰って来たばかりなのに、

僕達に赤ちゃんのこと誤解されて、

それから、結婚のことで責められて、

ついでおばあちゃんにも怒られちゃって。

なんだか……。

「紳一郎さん、あの」

「そんな目で見ないでくれ」

紳一郎さんは僕の言葉を遮るようにして顔をそむけた。

「え？あの、僕」

紳一郎さんはいきなりソファから立ち上がった。

「悪いが、少し休ませてもらうよ。」

昨日から寝てなくてね。冷静に話せそうにないんだ。

おばあさん、申し訳ありませんが、失礼させてもらいます。

晶子君、部屋は用意するように言っておくから」

紳一郎さんは一氣にそれだけ言って一礼すると

秘書のひとと一緒に部屋から出て行ってしまった。

ど、どうしよう。

追いかけて、離婚したくないって言わなくっちゃ。

脅されたことも、もう氣にしていって。

「リュウ、誰が器用な男だって？」

アンリさんが可笑しそうに言った。

香月さんも口に拳をあてて笑いをこらえている。

「撤回するよ。」

ね、望君。さつき、君泣いてたよね。

あんまり泣き顔が可愛らしいから、抱きしめたくなくて困ったよ」

「はあ？」

また変なこと言い出したよ、このひとは……。

今、そんな場合じゃないのに！

「どうして泣いちゃったの？」

「え……」

「私のこと紳一郎さんの愛人だと思ったんでしょ？」

晶子さんが優しい声で言った。

「紳一郎さんに愛人がいたことが許せなかったのよね。」

それで、離婚したいなんて言ったんでしょ？」

僕は戸惑いながらも頷いた。

「でも、もう誤解は解けたから、問題はないわよね？」

晶子さんはそう言つてにつこり笑った。

おばあちゃんや他のひと達も笑っている。

……ここにいるひと達には、僕の気持ちは何故かバレバレらしい。

「…はい。」

僕、紳一郎さんと話してきます」

紳一郎さんを疑つたこと、もう許してくれないかもしれない。

とても怖い顔してたもんね。

やっぱり離婚することになるのかもしれないけど……。

でも、

紳一郎さんに僕の気持ちを何も告げないままこの家を出て行くなんて絶対後悔することになるよね。

勇気を出さなくっちゃ！

僕はソファから立ち上がりドアに向かおうとした。

「ノゾミ！忘れ物だよ」

「え？」

アンリさんの声に振り返ると、何かが僕に向かって飛んできた。慌ててそれをキャッチする。

これって……。

「せっかく用意したんだから無駄にしないで欲しいな」

アンリさんはそう言つて僕にウィンクをした。

第三十五話

居間には紳一郎さんの姿はなかったけど、
テーブルの上に蓋が開いたままのブランデーの瓶とグラスが載って
いて、

ソファーにはスーツの上着が脱ぎ捨てられていた。

寝室かな？

「紳一郎さん？」

おそろのおそろの寝室のドアを開けると、床の上にワイシャツやネクタイが散らばっていた。

バスルームを使っている気配がする。

僕はそれを拾い上げ、軽く畳んでベッドの上に置いた。

「……………」

な、なんだかドキドキしてきた。

ベッドに腰掛けて胸を押える。

よく考えたら、僕って告白するのも初めてなんだ。

なんて言おう。

まず、晶子さんのことを疑ったこと、もう一度謝ったほうがいい
よね。

えーと、それから、離婚はしたくないって言わなくっちゃ。

ううん、それより前に紳一郎さんを好きだってことを言ったほうが
いいのかな？

ドアの開く音がして、僕は慌てて立ち上がりベッドから離れた。
バスローブを着た紳一郎さんが、髪を拭きながら出てくる。

「紳一郎さん」

僕が声をかけると、紳一郎さんは俯いていた顔を上げて僕の方を見た。

「……望」

「あ、あの、ごめんなさい！」

僕にいきなり謝られて、怪訝そうな顔になる。

「……何のことだ？君が謝ることは何も無いだろう」

「晶子さんのこと……」

「……ああ、そのことか。別にいいよ。君が俺のことを信じられなかったのも無理はないさ」

紳一郎さんは自嘲気味に言って、ベッドに腰掛けた。

乱暴な手つきでまた髪を拭き始める。

「あの……」

紳一郎さんの顔を見たらますます緊張して、何から話したらいいのかわからなくなってきた。

「これは？」

紳一郎さんが小さい箱を手にした。

応接室でアンリさんが僕に投げて寄こしたものだ。

さつきシャツを畳んだ時に、邪魔だったからベッドの上に置いたんだった。

「け、結婚指輪です」

「……」

紳一郎さんは複雑な顔をした。

「無駄になってしまったな。…俺のほうで処分しとくよ」

「え！？」

処分？

捨てちゃうの？

「だ、駄目です！」

僕が大声で叫んだので、紳一郎さんは驚いた顔をした。

「紳一郎さんが嫌じゃなかったら、その指輪、僕にください！」

「え？」

「だから、僕、あの……えーと」

言いたいことはたくさんあるのに、うまく言葉にならない。

……告白って難しい。

こんなことなら、もっと練習しとくんだったよ！

紳一郎さんは変な顔をしている。

「……………」

僕はベッドに腰掛けている紳一郎さんのところに行って真正面に立った。

そして、

彼の唇にそっと自分の唇を押し付けた。

第三十六話

紳一郎さんは、目を大きく見開いたまま固まっている。

今日は紳一郎さんのいろんな顔を見るなあ。

いつもきちんとした大人の男のひとなのに、今は髪がクシャクシャで、子供っぽく見える。

なんだか胸の中がくすぐったくなってきた。

何て言ったらいいのかわからなくて、行動で僕の気持ちを伝えようと思ったんだけど。

いきなりキスなんかして変だったかな？

急に恥ずかしくなって、下を向いてモジモジしていると紳一郎さんが僕の腕を掴んだ。

顔を上げると戸惑ったような顔で僕を見詰めている。

「……君は、俺のことを嫌っているんじゃないのか？」

紳一郎さんは、躊躇うような口調で言った。

「え？」

どうしてそんなこと言うんだろう？

嫌いな人に自分からキスするわけじゃないじゃないか！

「最初に君を脅すような真似をしたからな。好かれている自信はなかったよ。」

俺に触れられても抵抗しないのは、契約の為に我慢しているんだろうと思っていた。

それに、最近おかしかっただろう？

抱きしめても体が強張っていたし、俺を避けているようだった。

さっき離婚したいと言われた時、とうとう俺との結婚生活に堪えら

れなくなっただのかと思ったんだ」

「ち、違います！」

紳一郎さんを好きだってことに気づいて、意識しまくりだったんだよ！

「僕、変なんです。

紳一郎さんにキスされたらドキドキして、フワフワして、カチンカチンになっちゃうし、

傍にいられたら緊張して顔がまともに見れないし、言葉も出なくなっちゃうし、

こ、これって好きだから？」

だんだん声が小さくなってしまう。

自分でも何を言ってるのかわからないよ。

「わっ！」

掴まれていた腕を強く引つ張られて、僕は紳一郎さんの膝の上に乗っかってしまった。

……凄く恥ずかしい格好だ。

至近距離にある紳一郎さんの顔が、微笑んでいる。

「あの日、応接室で初めて君と話した時、からかいがいのありそうな男の子だと思ったよ。

俺の言うことにいちいち素直に反応して、困った顔がとびきり可愛くて」

「……………」

ついこの間、似たようなことを誰かに言われました。

「君にプロポーズを断られた時、どうしてあんなことを言ってしまったのか自分でもわからなかった。

プライドを傷つけられたせいかとも思ったよ。

自慢じゃないが、今まで振られたことなんかなかったからな。

……でも、違った」

紳一郎さんは真っ直ぐな瞳で僕を見て言った。

「君に、恋をしたからなんだ」

「え……？」

恋？

紳一郎さんが僕に？

紳一郎さんも僕を好きになってくれたってこと？
本当に？

紳一郎さんが目を瞠った。

「そんなふうに笑った顔を初めて見た」

え？そうだっけ？

……そう言えば、

この屋敷に来てから、心から笑った記憶があんまりない。
特に紳一郎さんの前では緊張してたから……。

「えくぼが出来るんだな。……今まで気づかなかったよ」

紳一郎さんはそう言って、人差し指で僕の頬を突付いた。

「望、

俺のものになってくれ。必ず幸せにするよ。約束する」

真剣な顔で言われて、僕はコクンと頷いた。

嬉しくて、胸がいっぱいで、涙が出そうになる。

紳一郎さんは嬉しそうに微笑んで、僕の体をギュツと抱きしめた。唇を重ねられて、そのままベッドの上に優しく押し倒される。

「指輪の交換は、後回しにしていいいか？」

「……はい」

そして、

その日僕は、紳一郎さんの本当の花嫁になったんだ。

最終話

朝吹邸の玄関前には、紳一郎さんを見送るために使用人の人達が整列していた。

昨日海外出張から帰ったばかりなのに、紳一郎さんは今日もお仕事なんだ。

いつものように帰りは真夜中なんだろうな……。

そつと溜息をついて、それから、こつそりと自分の左手を見た。

薬指にはプラチナの指輪がおさまっている。

夢じゃないんだよね？

あの後、紳一郎さんとはとても優しくかったけど、途中からちよつと意地悪だったような気がする。

だって………

つて、朝から何を思い出してるんだよ僕は！

「望ちゃん？」

「ひゃっ！」

いきなり後ろから肩を叩かれて、変な声を出してしまった。振り返ると、おばあちゃんと速水さんが並んで立っている。

「お、おばあちゃん……脅かさないで」

「何度も呼んだのに、気づかないんですもの。」

立ったままで寝ているのかと思っただわ」

「おばあさん、わざわざ見送りをして頂かなくても……。」

おやすみになっていてください。ギックリ腰は大丈夫なんですか？」紳一郎さんが気遣うようにおばあちゃんに言った。

「この時間じゃないと、あなたとお話ができませんからね。」

昨日はお客様をずっとほっといたままで、夕食にも顔を出さないし。龍二と、あの綺麗な外人さん…アンリさんだったわね。あなた達のことを心配して遅くまでいてくださったのよ？

うまくまとまったのなら、報告ぐらいしてくれればいいのにねえ」

「すみません」

「ごめんなさい。おばあちゃん」

「……紳一郎、仕事に行く前にその緩んだ顔をどうにかなさい。

ところで、加納さんはいるかしら？」

僕達へのお説教を済ませると、おばあちゃんは秘書の加納さんの姿を探した。

「はい。なんででしょうか？」

後ろにいた加納さんがおばあちゃんの前に進み出る。

「メイドさんに聞いたんだけど、この子結婚してから一日もお休みなしで働いてるんですって？」

紳一郎をこき使うのは構わないけど、望ちゃんに寂しい思いをさせるのは可哀想ですよ」

加納さんは僕の方に顔を向けて、唇を緩ませた。

「申し訳ありません。

どうしても来月は長期休暇を取りたいと仰るので、

休日返上の厳しいスケジュールになってしまったんです」

長期休暇？

「望とふたりで海外にでも行くのかと考えているんです。

彼も学校がありますからね。夏休みに合わせようと思ったんですよ」

「まあ、素敵。ハネムーンね？」

よかったわねえ、望ちゃん。どこか静かでロマンチックな場所でもいいからイチャイチャしていらっしやい。そうそう、おとし買った南フランスの古城なんかどう？

オブションで二百年前の幽霊カップルがついてるのよ。

残念ながらまだお会いしたことはないんだけど……。

それとも、結婚祝いに南の島をプレゼントしようか？へりとクルーザーもつけて。ね？」

「ありがとうございます。行き先は望と相談して決めますよ」

「…あの」

「ん？」

「お休みの間は、ずうっと紳一郎さんと一緒にいられるんですよね？」

僕は周りのひとに聞こえないように小さな声で言って、紳一郎さんを見上げた。

嬉しくて、思わずニコニコしてしまう。

紳一郎さんは目をパチクリさせた。

それから

いきなり僕の体をぎゅうっと抱きしめた。

し、紳一郎さん！

周りにはメイドさんや、おばあちゃんや、加納さんや…とにかく、まわりにひとがいっぱいいるんだよ！

紳一郎さんは、優しく微笑んで僕の唇にキスを落とすと、耳元でひと言囁いた。

それは、

甘くて、

ふわふわして、

あつたかくて、
とっても幸せな気持ちになれる
魔法の言葉だったんだ。

e n d / S W E E T T R A P

最終話（後書き）

最後までおつき合いいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2959p/>

SWEET TRAP

2011年1月17日12時38分発行